福岡市

羽根戸古墳群

- 西区西部墓園建設にともなう調査(2) - 羽根戸古墳群 E 群の調査 福岡市埋蔵文化財調査報告書第198集

1 9 8 9

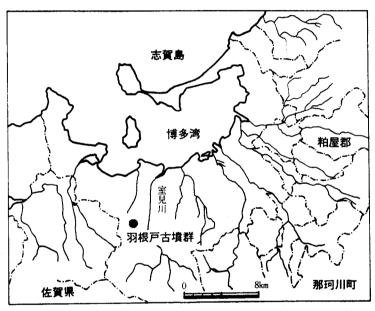
福岡市教育委員会

羽根戸古墳群 (198集) 正誤表

ページ	行	, E	Œ
14	. 5	N-83° -W	N-83°-E
17	13	全壁高	前壁高
Fig 20		方位が南北逆方向	
25	18	N-87° -E	N-87° -W
26	1	石側壁	右側壁
30	19	N-72° -W	N-72° -E
36	13	金箱	金箔
47	11	内部には毛根の…	内部には植物の毛根の
48	9	(中宮1号.上総金鈴塚例)	(中宮1号.6世紀前半)
48	· 11	6世紀以降	6世紀中頃以降
48. 地名裘	No.13	ハマグリ・サソリガイ	オキシジミ レイシ
(日本)		•	
49. 地名表	No.20	慶北. 達西面	大邱市
(韓国)	} 	1	
50. 文献	No.20	上田神	上田三平
(日本)	}	1	<u>,</u>
50. 文献	No.1	周辺石榔基	周辺石槨墓
(韓国)	<u> </u>	Va (62Aa	l L

NO. 16780

羽根戸古墳群



遺 跡 略 号 HDK-E 調査調査番号 8746

1 9 8 9

福岡市教育委員会

序文

近年、福岡市域と周辺地域では、都市化にともなう人口の増加 が著しく、このための諸開発によって、市域に数多く分布する古 来の遺跡に対しても、影響がでてきています。

福岡市教育委員会では、このような開発によって失われる遺跡 の保存調査に努めているところであります。

今回の調査は、西区西部墓園建設地内にある古墳群が対象となりました。幸い、関係各位の御尽力により、墓園内に整備保存されることになりました。将来、霊峰飯盛山の麓に眠る古代人と現代人の魂が安らかに邂逅し、また訪れる人達の心を和らげてくれることを願ってやみません。

調査に際しましては、関係各位に御協力を頂き、多くの成果を 得ることができました。本市文化財に対する皆様の御理解に、深 く感謝いたします。

平成元年3月31日

福岡市教育委員会 教育長 佐藤 善郎

例 言

- 1 本書は福岡市教育委員会が、市営西部墓園建設にともなって、1987年12月~1988年3月におこなった羽根戸古墳群E群の調査報告書である。
- 2 遺構の実測は、横山邦継・宮井善朗・大橋隆司・長家 伸・中村真由美があたり、松尾和浩・大岡弘明・尾崎利 一の協力を得た。
- 3 遺物の実測は、宮井・長家・大橋が行なった。
- 4 遺構の写真撮影は横山が行った。また遺物の写真撮影 は宮井が行なった。
- 5 遺構 遺物の製図は宮井・大橋が行ない、高橋健治・ 吉村知子が補助した。
- 6 本書の執筆は、宮井が行なった。また8号墳出土の須 恵器内の魚骨について、佐賀大学講師木村幾多郎氏より 玉稿を頂いた。記して感謝申し上げます。
- 7 本書の編集は、横山・宮井協議のうえ宮井がこれにあ たった。
- 8 本報告書に収録した遺物および記録類は、福岡市埋蔵 文化財センター(博多区井相田二丁目)に収蔵、保管されるので活用されたい。

本文目次

Ι	は	じめに	• • • • • • • • • •	••••••	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • •	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	··· 1
II	遺	跡の立	地と環	滰	•••••		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •			3
	調	査の記	録			•••••		•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	7
	1.	第1号	古墳…		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••			•••••		8
	2.	第2号	古墳…			•••••	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •			···13
	3.	第3号	古墳…	•••••		••••	•••••		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	…17
							• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •					
	5.	第5号	古墳…			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	23
							• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •					
IV	小	結	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	•••••				···43
,	付編	8号	墳羨道	内出土土	器内より	検出され	れた魚骨に	ついて				
								14-	70 J. 24 J. 2	14. #L =# 6.1		A no

挿図目次

Fig.	1	周辺遺跡分布図(1:50,000) 4
Fig.	2	遺跡位置図(1:40,000) 5
Fig.	3	羽根戸古墳群 E 群現況測量図 (1 :300)(折り込み)
Fig.	4	1号墳石室実測図(1:50)(折り込み)
Fig.	. 5	1 号墳出土遺物実測図(1)(1 : 3)10
Fig.	6	1号墳出土遺物実測図(2)(1:3)11
Fig.	7	1 号墳出土遺物実測図 (3)(1 : 2)12
Fig.	8	1 号墳出土遺物実測図(4)(1 : 1)13
Fig.	9	2 号墳石室実測図(1:50)(折り込み)
Fig.	10	2 号墳出土遺物実測図(1)(1 : 3)15
Fig.	11	2 号墳出土遺物実測図 (2)(1 : 2)16
Fig.	12	2 号墳出土遺物実測図 (3)(1 : 1)17
Fig.	13	3 号墳石室実測図(1:50)(折り込み)
Fig.	14	3 号墳遺物出土状況図 (1:20)
Fig.	15	3 号墳出土遺物実測図(1)(1 : 3)20
Fig.	16	3 号墳出土遺物実測図(2)(1 : 2)
Fig.	17	3 号墳出土遺物実測図 (3)(1 : 1)22
Fig.	18	4 号墳石室実測図(1:50)(折り込み)
Fig.	19	5 号墳出土遺物実測図(1)(1 : 3)24
Fig.	20	5 号墳石室実測図(1:50)(折り込み)
Fig.	21	5 号墳出土遺物実測図 (2)(1 : 2)25
Fig.	22	5 号墳出土遺物実測図 (3)(1 : 1)25
Fig.	23	6 号墳石室実測図(1:50)(折り込み)
Fig.	24	6 号墳出土遺物実測図(1 : 3)27
Fig.	25	7号墳石室実測図(1:50)(折り込み)
Fig.	26	7 号墳出土遺物実測図(1)(1 : 3)29
Fig.	27	7号墳出土遺物実測図(2)(1:1)30
Fig.	28	8号墳石室実測図(1:50)(折り込み)
Fig.	29	8 号墳羨道部遺物出土状況 (1:20)31
Fig.	30	8 号墳羨道出土遺物実測図(1)(1 : 3)33
Fig.	31	8 号墳羨道出土遺物実測図 (2)(1 : 3)34

Fig.	32	8 号墳羨道出土遺物実測図(3)(1 : 2)35
Fig.	33	8 号墳羨道出土遺物実測図 (4) (1:1)36
Fig.	34	8 号墳墓道遺物出土状況(1:20)37
Fig.	35	8 号墳墓道出土遺物実測図(1)(1 : 3)38
Fig.	36	8号墳墓道出土遺物実測図(2)(1:3)39
Fig.	37	8号墳墓道出土遺物実測図(3)(1:3)41
Fig.	38	8号墳墓道出土遺物実測図(4)(1:1)
Fig.	39	8号墳墓道出土遺物実測図(5)(1:3)(折り込み)
Fig.	40	羽根戸古墳群 E 群平面図集成(1:100)
Fig.	41	8 号墳出土魚骨

図版目次

- PL. 1 1. 1号墳全景 (東から)
 - 2. 1号墳羨道(東から)
- PL. 2 1. 1 号墳石室前壁
 - 2. 1号墳石室玄門
- PL. 3 1. 1号墳右側壁
 - 2. 1号墳奥壁
- PL. 4 1. 2号墳全景 (西から)
 - 2. 2号墳床面(東から)
- PL. 5 1. 2号墳奥壁
 - 2. 2号墳羨道遺物出土状態(北から)
- PL. 6 1. 3 号墳石室前壁
 - 2. 3号墳石室玄門
- PL. 7 1. 3 号墳石室奥壁
 - 2. 3号墳石室奥壁
- PL. 8 1. 3号墳閉塞部(北から)
 - 2. 3号墳墓道部遺物出土状態(北から)
- PL. 9 1. 4号墳全景(西から)
 - 2. 4号墳石室奥壁
- PL. 10 1. 4号墳石室(西から)
 - 2. 5号墳石室奥壁
- PL. 11 1. 5号墳全景(西から)
 - 2. 5号墳閉塞部(北から)
- PL. 12 1. 5号墳石室前壁
 - 2. 5号墳石室玄門
- PL. 13 1. 6 号墳全景
 - 2. 6号墳石室玄門
- PL. 14 1. 6号墳石室奥壁
 - 2. 7号墳全景
- PL. 15 1. 7号墳石室前壁
 - 2. 7号墳石室玄門

- PL. 16 1. 7号墳石室奥壁
 - 2. 7号墳石室奥壁
- PL. 17 1. 8号墳石室前壁
 - 2. 8号墳石室玄門
- PL. 18 1. 8号墳石室奥壁
 - 2. 8号墳石室奥壁
- PL. 19 1. 8号墳羨道部遺物出土状態(西から)
 - 2. 8号墳墓道遺物出土状態(南から)
- PL. 20 1. 9号墳全景(西から)
 - 2. 9号墳石室(西から)
- PL. 21 1.12号墳石室現状(東から)
 - 2. 羽根戸古墳 E 群遠景 (北から)
- PL. 22 1. 1号墳出土土器
- PL. 23 1~3号墳出土土器
- PL. 24 3~6号墳出土土器
- PL. 25 7号墳出土土器
- PL. 26 8号墳出土土器 (1)
- PL. 27 8号墳出土土器 (2)
- PL. 28 8号墳出土土器 (3)
- PL. 29 1号墳出土鉄器
- PL. 30 2、5号墳出土鉄器
- PL. 31 3号墳出土鉄器
- PL. 32 8号墳出土鉄器
- PL. 33 各古墳出土装身具類

I. はじめに

1. 調査に至る経過

昭和60年、西区大字羽根戸に計画された「西部墓園」建設が具体化し、担当の都市計画局(現 都市整備局)公園建設課より、事業計画とともに、事業地内における埋蔵文化財の有無および 工事による影響についての調査依頼が、埋蔵文化財課に出された。

事業は墓園本体と、進入道路の拡幅工事がその主なものである。進入道路については、保存が困難な状況であり、道路部分にかかる羽根戸原C遺跡 防災工事の法面調整にかかる羽根戸 古墳群N群は、記録保存の措置がとられた。調査は1985年5月から1986年6月にかけて行われ、その成果は、昨年度に報告書が公刊されている。(「羽根戸遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第180集)

墓園本体部分では、対象地内に、羽根戸古墳群 E 群が分布していることから、建設区域から、はずすよう協議がなされた。その結果、設計変更によって古墳を現状保存し将来的には、墓園の縁地部分にとり込む形で整備するということで合意がなされた。これを承けて、基準資料を得るための調査を行うことになり、1987年12月17日から調査を開始した。

発掘調査にあたっては、担当課である公園建設課井上氏、工事施行の西鉄グリーン株式会社には、調査中数々の御協力を賜った。記して感謝する次第である。

遺	遺跡調査番号 8746						ŭ	貴 跡	略	各号	HDK-E						
調	周査 地 地 籍 西区大字羽根戸						5	} 布垍	也図	番号	号 叶岳 105						
調	査	面	積	古	墳	9	基	調査対象面積	古	墳	9	基	調査実	施面積	古墳	8	基
調	査	機	関	1987年12月17日~1988年3月30日					В		1	事前審	查番号		62-373		

事業主体 福岡市都市整備局公園建設課

調査期間 1987年12月17日~1988年3月30日

調查主体 福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

埋蔵文化財課長 柳田純孝

埋蔵文化財第1係長 折尾学

庶務担当 岸田隆

調查担当 横山邦継 宮井善朗

また発掘調査および、これにつづく整理作業においては、以下の方々の御協力をいただいた。 (敬称略)

調査補助 大橋隆司 長家伸(九州大学)

発掘調査 尾崎利一 廣瀬梓 松尾和浩 大岡弘明 因ヨシ子 井上ムツ子 井上清子 井上磨智子 井上ヒデ子 井上カヅ子 井上トミ子 倉光アヤ子 倉光京子 倉光千鶴子 倉 光信子 小柳和子 斉藤国子 佐藤みづほ 清末シヅエ 富永ミツ子 富崎栄子 徳永ますみ 永井鈴子 西山秀子 柳浦八重子 結城千代子 横溝千江子 横溝恵美子 横溝カヨ子 中村 真由美

整理作業 太田頼子 西原由規子 飯田千恵子 浜野年代 小森佐和子 土斐崎つや子 倉 吉立子 吉村知子 井上靖崇 井上絹子

Ⅱ. 遺跡の立地と歴史的環境

羽根戸古墳群の位置する早良平野は、福岡市の中心部を占める福岡平野の西側に位置している。東側は、油山山塊と、それから北へ派生する鴻ノ巣山丘陵、油山北台地が海岸付近までのび、福岡平野との境界を画している。西側は、背振山系から派生して金山、飯盛山、叶岳、長垂山に至る各山塊によって糸島平野と画されている。平野の中央部を室見川が貫流する。各時代の遺跡は、平野縁辺部、中央部に残存する低、中位段丘や、海岸部の砂丘地域を中心に分布している。ここでは古墳時代を中心に、早良平野の遺跡について概観していこう。

古墳出現期~前期

古墳出現期前後の埋葬遺跡として、宮ノ前遺跡、野方中原遺跡、五島山古墳、藤崎遺跡、重 留遺跡、飯盛谷遺跡等があげられる。

宮の前遺跡は、弥生時代終末期の墳丘墓で近年では前方後方形の可能性も指摘されている。 3基の箱式石棺が存在し、突出した勢力をもった特定近親者集団の墓と見られている。野方中 原遺跡の墓地は、弥生時代終末から 古墳時代の初頭にかけての石棺墓で構成されている。1 号石棺墓、3号石棺墓からは、後漢鏡が出土している。重留遺跡では、箱式石棺より鳥文鏡が 出土している。

これら在地色のつよい墳墓に対して、畿内を初めとした外来色の強い墳墓もまた、出現している。藤崎遺跡は、方形周溝墓を主体とした埋葬遺跡で、6号周溝墓からは三角縁二神二車馬鏡が出土している。また過去にも、箱式石棺墓より三角縁二神龍虎鏡、方格渦文鏡が発見されており、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての大墓地であることが知られている。また、飯盛谷遺跡でも、方形周溝墓群が検出され、後漢鏡、石釧が発見されている。また、五島山古墳は、独立丘陵上に営まれた箱式石棺墓群で、斜縁神獣鏡2面、銅鏃、鉄剣等が出土している。この時期の墳墓のあり方を見ると、副葬品(特に鏡)をもつ墓は、ほぼ旧郷程度の範囲を一単位として分布する。これは、弥生時代遺跡のまとまりともほぼ一致する。また、いわゆる畿内型の古墳は、樋井川流域の京ノ隈古墳以外には見当らない。西新町、藤崎のように、多量の外来系土器が流入し、墓制もドラスティックに変化する所もあるが、ほとんどは、在来の伝統を強くひきずって、ゆるやかに古墳時代へ移っていったようである。

中期

中期に入ると、早良平野にも定形化した古墳が造営される。拝塚古墳(重留1号墳)は全長70mの前方後円墳で、墳丘の周囲に一重の周溝をめぐらす。墳丘には葺石をめぐらせ、円筒埴輪、形象埴輪が並べられていたと考えられる。4世紀末から5世紀初頭の築造と考えられている。すぐ西側に方墳とされる重留2号墳がある。

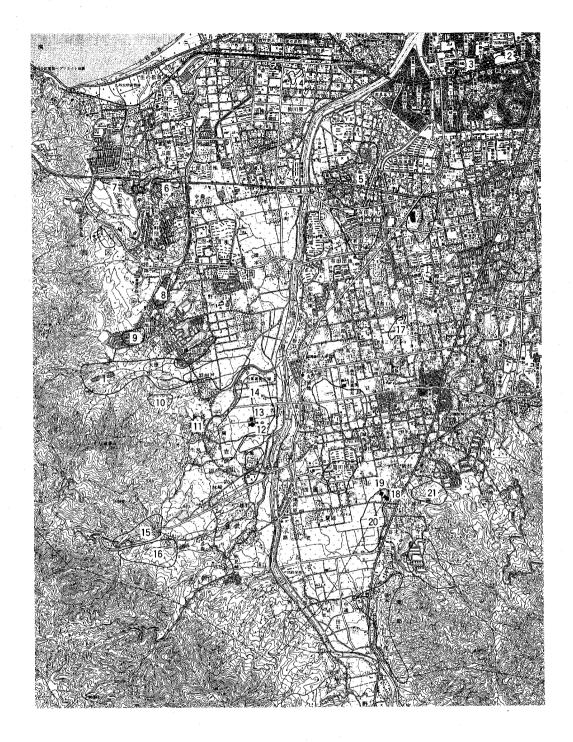


Fig. 1 周辺遺跡分布図(1:50,000)

- 1 羽根戸古墳群 (アミ部=E群)
- 2 西新町遺跡
- 3 藤崎遺跡
- 4 五島山古墳群
- 5 有田遺跡群
- 6 湯納遺跡
- 7 宮の前遺跡
- 8 野方中原遺跡
- 9 野方古墳群
- 10 羽根古南古墳群
- 11 飯盛谷遺跡
- 12 樋渡古墳

- 13 樋渡2号墳
- 14 吉武遺跡群
- 15 金武古墳群吉武支群
- 16 金武古墳群乙石支群
- 17 免遺跡群
- 18 拝塚古墳 (重留1号墳)
- 19 重留 2 号墳
- 20 重留遺跡群
- 21 重留古墳群

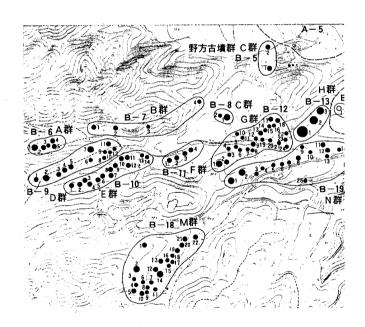


Fig. 2 遺跡位置図(1:40,000)

樋渡古墳は全長40mの帆立貝形の古墳である。墳丘の周囲に一重の周溝がめぐる。墳丘には 葺石をめぐらせ、円筒埴輪が並べられている。主体部は、竪穴系横口式石室と推定されている。 5世紀前半から中頃の築造と考えられている。この周辺では、樋渡2号墳(方墳、5世紀後半)、 樋渡3・4号墳(円墳 5世紀末)と後続する。

この他に、中期古墳に属するものに 吉武古墳群があげられる。10数基からなる円墳群で主体部は、竪穴系横口式石室と考えられる。陶質土器、初期須恵器を多数出土した。5世紀末と考えられている。この時期の古墳のあり方を見ると、前代に各地域に出現した有力者層が、次第に収束され、早良平野全体を総括する首長の墓として、拝塚古墳の出現を見たと考えることができよう。しかし、首長墓級の大規模古墳は、樋渡古墳以後は継続せず、小規模の群集墳を形成する。従って首長権を支える基盤は脆弱で、構成員に対する規制力も弱かったものと考えられる。

後期

後期には、平野縁辺部の丘陵を中心に群集墳が多く形成される。6世紀前半から中頃、羽根戸 古墳群、羽根戸南古墳群で点々と築造がはじまり、6世紀後半代にピークを迎える。羽根戸古 墳群をはじめとする飯盛山麓でも、金武古墳群(147基)、羽根戸南古墳群(20基)、羽根戸古 墳群(143基)、野方古墳群(18基)と、多数の古墳が築造されている。

羽根戸古墳群は、飯盛山塊から北東に派生して、舌状にのびる丘陵群の南北両斜面に分布する。A~P群の16支群に分けられている。石室規模が群を抜いて大きいのはH群の3基である。 E群は北端部のA群、B群、C群から、谷を隔てた北向きの斜面上に位置する。

生活、生産遺構

早良平野の生活、生産関係の遺構は調査例が多くない。前期では、西新町、野方中原、湯納遺跡等があげられる。また、有田遺跡は、前期から後期にわたって集落が営まれている。中期では、吉武遺跡群で、掘立柱建物、竪穴式住居が多数検出されている。また生産遺跡では、原深町、鶴町遺跡等で前期の水利施設、重留遺跡では6世紀初頭の須恵器窯が調査されている。

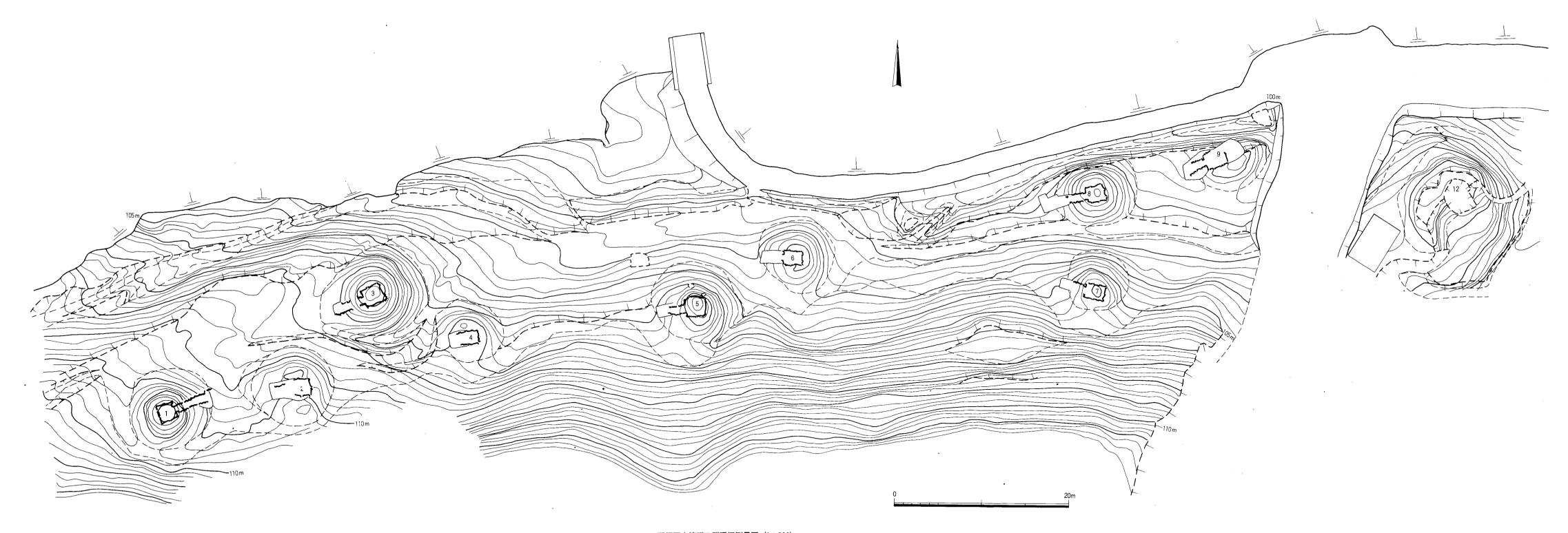


Fig. 3 羽根戸古墳群 E 群現況測量図(1:300)

Ⅲ. 調査の記録

調査の概要 羽根戸古墳群 E 群は、西部墓園内に保存して、整備し、古墳群を身近に見ることができる遺跡公園として活用されることになる。今回の調査は、そのために必要な基本資料を得ることが目的である。その目的を達するために、以下のような方針で調査を行った。

- 。正確な地形測量図の作成(1:200)
- 。石室内に崩落した土砂や岩を取り除き、古墳が使われていた時の面(のうち最も上層にある面)を検出する。また上記の面での、石室の実測図を作成する。調査後は、将来の整備にそなえ、現状以上に崩壊しないような保存措置を行う。

この結果、石室に溜まった埋土を取り除くための、必要最少限のトレンチ以外は、ほとんど 表面調査に近い調査となったが、思いのほか、豊富で興味深い成果を得ることができた。

羽根戸古墳群 E 群は、福岡市文化財地図によると、14基の古墳からなる。そのうち、9、10、11号墳は、砂防ダム建設に伴って、福岡県教育委員会による調査が行われている。今回の調査は1~9号墳が対象で、既に調査されている9号墳を除く1~8号墳を調査した。

古墳群は、標高100m~110mの西から東に述びる尾根の北斜面に位置している。各古墳の墳丘はすべて円墳である。石室はすべて単室で両袖型の横穴式石室である。石室の方向は、1号墳が東向きである他は、すべて西に開口している。以下、簡単に各古墳について述べていこう。 (Fig.3)

1号墳は、もっとも谷奥にある。石室は長い羨道部をもつ。石室、羨道の埋土から、須恵器、 鉄器、玉類が出土した。

2 号墳は、1 号墳のすぐ西側にある。天井石が、石室内に大きく崩れ落ちている。羨道部で、 二面の埋葬面を確認した。土師器、須恵器、鉄器、耳環、銀環などが出土した。

3号墳は閉塞施設がよく残っており、石室内に入るのに苦労した。墓道部から鉄滓が出土している。4号墳も、天井部や、側壁の一部を失っている。5号墳は、4号墳から25m程離れた東側に位置している。石室は谷測に若干傾いている。6号墳も天井を失う。埋土から須恵器が出土した。7号墳は6号墳から東へ30m程離れている。埋土から須恵器、土師器が出土した。

8号墳は7号墳の北側にある。墓道から破砕土器が、羨道から完存土器がまとまって出土した。完存の坏の中には、魚の切身や、鉄器が収められていた。

1. 第1号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3、PL.1-1)

1号墳は、谷筋の最も奥まった所にある。古墳群中最も高い所であり、墳頂を112mの等高線がめぐる。現状では、墳丘径9.5mを測るが、南側は、尾根からの流土でかなり埋め立てられているのではないだろうか。墳裾からの比高差は、北側の最も落差のある所で、2.75mである。

(2) 石室 (Fig.4、PL.1-3)

石室は、単室で両袖型の横穴式石室である。主軸を $N-66^\circ-E$ にとる。1 号墳の石室のみが東側に向かって開口している。

玄室は、ほぼ正方形である。玄室の規模は、奥壁幅2.0m、右側壁幅2.0m、左側壁幅1.85m、 天井までの高さ2.5m、前壁高1.2mである。前壁が高いのが特徴であろう。玄室内は過去の盗 掘をうけており、敷石が半分位抜きとられている。

奥壁は、三角形の石と、その半分位の石を腰石に据え、その小さい方の石の上と、三角形の石と右側壁との間に、それぞれ3段づつ積み、高さを合わせた上に2段積み、その上から持ち送って天井に至る。持ち送りのはじまる高さは、楣石の高さにほぼ近い。全体的に横に目地を通した。煉瓦積みの手法がうかがえる。

右側壁は、長方形の大ぶりの転石と平たい小ぶりの転石2個を腰石とし、このすぐ上から持ち送って天井に到る。左側壁もほぼ同様で、腰石2個のすぐ上から持ち送る。したがって玄室の横断面は「い」の字形になる。側壁は、縦に目地が通る重箱積みの手法がうかがえる。

玄門は、ほぼ同じ高さの転石2個を袖石にして、その上に2段積んで楣石を架けている。梱石から楣石までの高さは1.15mである。前壁は、楣石の上からほぼ直に立ちあがり、上から2段目から持ち送って天井に至る。

敷石は約半分が遺存している。右袖石付近の敷石の上から、赤焼きの須恵器坏身が、伏せた 状態で出土した。

羨道部は梱石から測って3.8mでやや長めである。羨道幅は、玄門部で0.6m、閉塞部で0.75m、開口部で0.9mである。羨道のほぼ中央部(梱石から2m)に、比較的大きめの石をおいているが、これが、閉塞施設の根石と考えられる。閉塞内左側壁付近で完形の須恵器坏身が出土した。これは原位置に近いものと考える。閉塞外には転石の集積が見られるが、閉塞施設の崩落した名残りではないかと考えられる。

羨道部の壁面は、玄室に比べると雑な積み方をしている。閉塞内はやや大ぶりの、閉塞外はやや小ぶりの転石を雑然と積みあげている。羨道部の天井は楣石を含めて2枚の石を架け、構築している。羨道部左側壁は開口部から、若干南方へ回り込んでいくような状態を示しており、外護列石と接続する可能性もあるが、未掘のため確認はしていない。

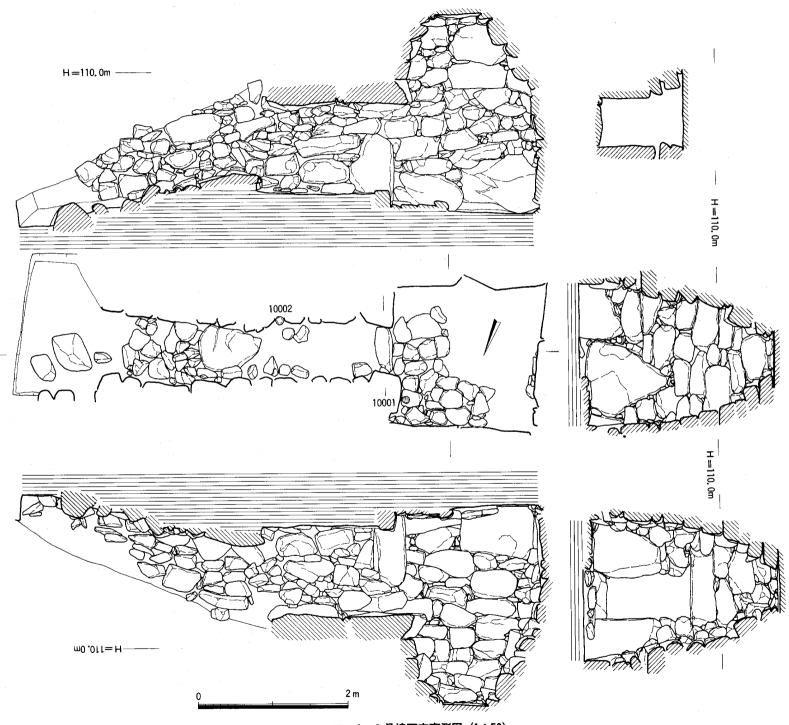


Fig. 4 1号墳石室実測図 (1:50)

- (3) 出土遺物
- ① 土器 (Fig. 5.6、PL. 22-23)

古墳群全体を通じて、最も多く出土しているのは須恵器で、その中でも坏蓋、坏身の出土が 多い。従って簡潔な記述を行うために、ある程度類別しておく必要があろう。そこで、以下の 記述では、坏蓋、坏身を以下のように大別する。

坏蓋Ⅰ類 口縁部と天井部の境が、段や沈線で、比較的明瞭に区別される。口縁内側にも段がつく。**坏蓋Ⅱ類** 区別が不明瞭または区別がなくなる。**坏蓋Ⅲ類** 内面にかえりをもつ。**坏蓋Ⅳ類** 天井につまみをもつ。

坏身Ⅰ類 受部をもつもの。**坏身Ⅱ類** 受部をもたず、平底のもの。**坏身Ⅲ類** 高台をもつ もの。なお、細別は、遺物の各説の際に行うことにしたい。

坏蓋 1号墳出土の坏蓋はⅡ類がほとんどで、破片で一点Ⅲ類(10019)が出土している。

10007は、口径が大きく、口縁内面に段がつくが、すでに、天井部と口縁部の境界は不明瞭である。 I 類の形制をひくもので、これを II a 類とする。10023、012、005、011、025は、やや口径を減じる。天井は丸みを帯びて、口縁部との境界は消失する。回転へラ削りは多くは外面の%程の範囲に施される。これらを II b 類とする。005は、ヘラ削りによる稜線のはじまる位置は高いが、下半をややナデ消されており、砂粒の動きをみれば、ヘラ削り自体は若干下まで施されている。10004、009、006、014、015は、更に径が小さくなり、11~13cmになる。回転へラ削りは天井付近に施されるのみで、その結果、天井が平坦になっているものが多い。これを II c 類とする。 II c 類は、口縁部で屈曲している例が多い。009、006、015はその例である。004、014は更に口唇部でわずかに屈曲して外反する。

坏身 1号墳出土の坏身は、すべてⅠ類である。

10024は、かえりの立ち上りが、直に近く高い。受部径14.0cmで、大ぶりである。稜線として表われていないが、ヘラ削りは、外面32程まで施されている。これを I a 類とする。10022、013は、 I a 類に比べて、立ち上がりが低くなり、内傾する。これを I b 類とする。ヘラ削りはいずれも外面の32程まで施されている。10014は、 I b 類とするには、立ち上がりが低く、内傾の度がきついが、外面のヘラ削りが底部から32以上施されていることや、底部が平坦になっていないことなどから、 I b 類に含めておく。10001、002、003は、かえりの立上りが、更に短く内傾し、小形化する。受部は、外方へ水平に突出するものが多い。受部径で12~13cmである。これを I c 類とする。ヘラ削りは、底部付近にのみ施され、その結果、底部が平坦となる。10001は、玄室右袖近くの敷石上に伏せられていたものである。焼成が悪く、還元しきれずに、内面は明赤褐色をしている。底部は、ヘラ切りの後、雑なナデを加えている。10003も、焼成、調整が001に酷似する。また、底面に同一のヘラ記号が記されており、同一焼成時の一単位中の2 個であった可能性が高いと考えられる。また、ヘラ記号の各辺の切り合いは同じで、同一

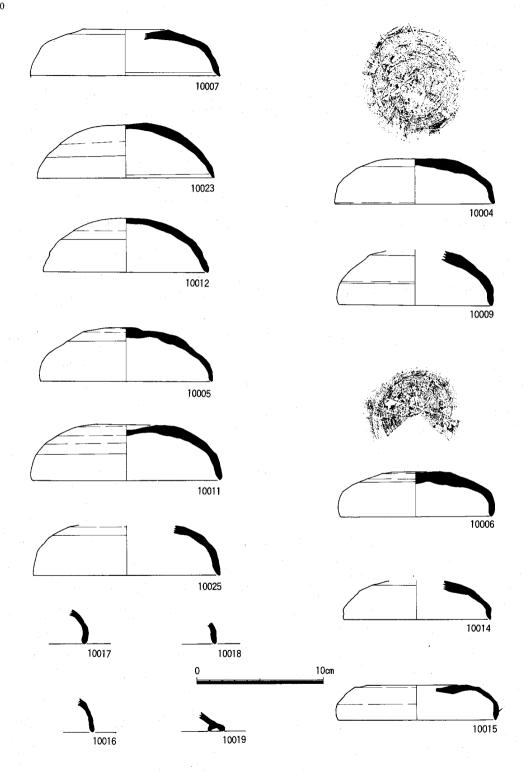


Fig. 5 1 号墳出土遺物実測図(1)(1:3)

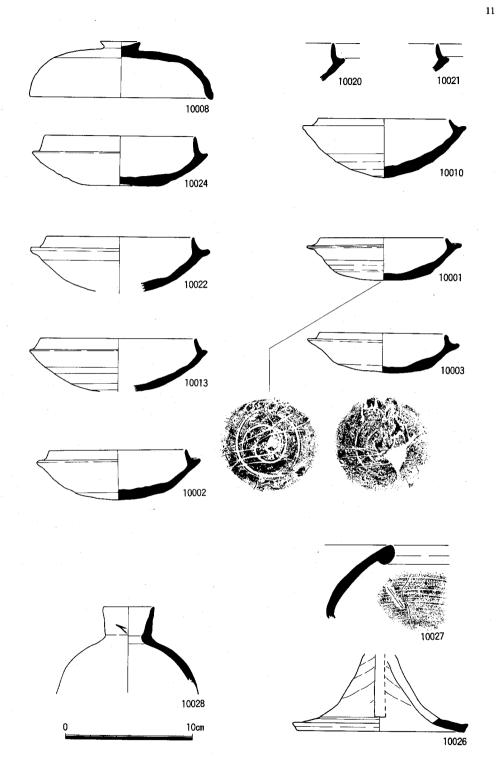


Fig. 6 1 号墳出土遺物実測図(2)(1:3)

工人の手になるものの可能性もある。

その他の器種 10008は高坏蓋である。坏蓋 II b 類に紐をつけた器形である。10028は、小形の提瓶である。外面は回転へラ削り、内面は回転ナデ調整である。10028は、甕の口縁部である。 玉縁状の口縁端をもつ。頸部外面はカキ目調整で、ヘラ記号がある。10026は、高坏脚部である。 絞り痕を明瞭に残す。内外面回転ナデ調整を施す。

② 鉄器 (Fig.7、PL.29)

1号墳出土の鉄器には工具、武器がある。

工具 10101は、鉄斧である。刃部の一端を欠くが、ほぼ刃部幅3.8cmに復元できる。袋部幅3.6cm、袋部高2.3cmである。4.3cmの深さがある。袋部先端から刃部がやや広がる。

武器 武器には、鉄刀(?)と鉄鏃がある。

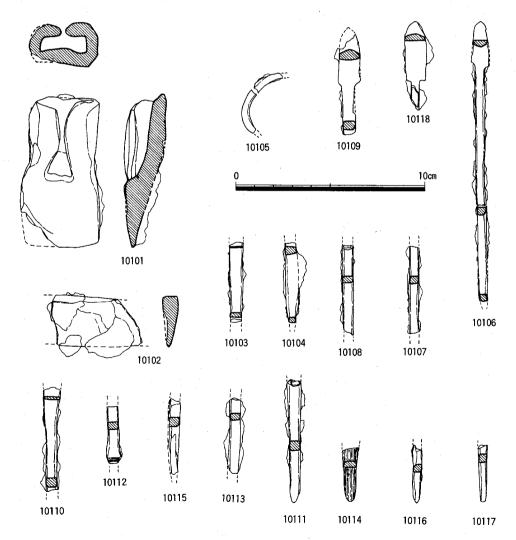


Fig. 7 1号填出土遺物実測図 (3) (1:2)

鉄刀 (10102) 10102は片側に刃がつくものと思われ、鉄刀と考えられる。銹化が著しい。 鉄鏃 (10103、10104、10106~10118) 鉄鏃は、破片数にして15点出土した。同一個体もあると思われ、実数は若干減るかもしれない。

鋒部は、10109、10118、10106の3点である。いずれも片丸造の鑿箭式である。109は鋒部長 (残存) 2.8cm幅1.1cm、106は鋒部長3.1cm、幅0.9cm、118は鋒部長2.4cm、幅1.1cmである。106は12.3cm分茎が残るが、篦被は認められない。10110は、先端が薄くなっており、斧箭式の鉄鏃の関部と考えられる。10103も、先端が薄くなるがあまり広がらない。細根式の斧箭式と思われる。10112は篦被の部分である。茎側に木質が残っている。10111、10114、10116、10117は茎の先端部である。いずれも若干尖り気味に仕上げられている。114は全面に木質が付着している。104、108、107、115、113は茎の破片である。断面は四角形である。

鉄鏃の茎は、中が空洞であるものが多い。これは脱炭が充分でないために、中心部に集まっていた炭素が抜け出てしまった結果である。鉄鏃の生産は、大量生産に対応するため、粗製濫造となっているのであろう。

不明金属製品 (10105) 10105は、環状の金属製品である。折損面は白っぽく、鉄製品とするにも疑問がある。装身具の一種であろうか。鉄器はいずれも、玄室埋土からの出土である。

③ 装身具類 その他の遺物 (Fig.8、PL.33)

1号墳からは、小玉が3点出土している。いずれも、玄室埋土からの出土である。

10201は、ガラス製小玉である。色はコバルトブルーである。10203は滑石製の玉である。 10202もガラス製小玉である。色はライトブルーである。

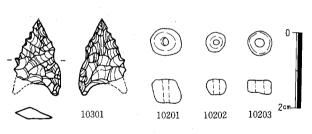


Fig. 8 1 号墳出土遺物実測図(4)(1:1)

10301は、玄室埋土から出土した黒曜石製の石鏃である。両側縁は鉅歯状になる。羽根戸古墳群周辺で、縄文時代遺物が出土することは珍しいことではなく、福岡県教育委員会によるD群の調査、西部墓園関係の一次調査であるN群の調査でも、縄文時代の土器、石器が出土している。近辺に縄文時代の遺跡があると考えられる。

2. 第2号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3、PL.4-1)

第2号古墳は、1号墳の東側に位置する。墳裾の最も近い所で測ると、1号墳から5m離れている。墳丘は現状では、径9~9.5mの円墳であるが、南側は、現状の裾部から墳頂までの

比高差が25cm程しかなく、屋根上から流れ込んだ土砂で、かなり埋め立てられていると思われる。北側の最も落差のある所での墳頂との比高差は1.5mである。

(2) 石室 (Fig.9、PL.4-5)

石室は、玄門付近から石室中央にかけて天井石が崩れ落ちており、大破している。単室の両袖型の横穴式石室であろう。主軸の方向をN-83°-Wにとり、西側に向かって開口している。

玄室の規模は、奥壁幅1.8m、右側壁幅1.8m以上、左側壁幅1.7m以上であり、ほぼ正方形に近い形になるのであろう。高さは、奥壁の現存高1.6m、左側壁の現存高1.9mである。

玄室の構築は、とくに腰石に大きな石を用いたという感はなく、全体的に大ぶりの石を用いている。奥壁は、2個の箱形の腰石の上に、不定形の大石と、その間を埋めるやや小さい転石で、構築されている。石が不定形であるため雑然と見えるが、横に目地をとおしたものと見てよかろう。左側壁は、大ぶりの箱型の転石で整然とした煉瓦積みで構築されている。奥壁では、持ち送りが見られず、左側壁では、下から5段目から持ち送りが見られる。復原すると、天井高は2.5m近くなると思われ、1号墳のような前壁の高い玄室が考えられる。右側壁は、腰石を残して、ほとんど崩れ落ちている。玄門、袖石等の状態は不明である。

敷石は、約半分遺存している。敷石面から、銀環、鉄斧、鉄刀子、不明鉄器が出土した。

羨道は、閉塞施設の西端まで測って、約3m程であろう。壁面は、左側壁を見ると、玄室と同じく、大ぶりの石を整然と積んでいる。羨道では2面の埋葬面を検出した。第1面は、黒色土層を取り除いて検出した黄褐色土層面で、床面から7世紀後半代の須恵器蓋坏、土師器盤などが出土した。第2面は、第1面の下約10cmで検出した敷石面で、第1面を掘りすぎた際に確認したものである。敷石面から耳環1個が出土した。第2面は、全掘せずに埋め戻した。

閉塞施設は羨道端から約1.6mの所から遺存している。上部の方は落石との区別がはっきり していないが、小ぶりの角礫を積みあげた70cm程までが、本来の閉塞施設であろう。

(3) 出土遺物

2号墳からは、須恵器、土師器、鉄器、耳環、銀環が出土した。羨道床面や、玄室敷石面など、現位置に近い状態と考えられる遺物も多い。

① 土器 (Fig.10、PL.23)

20001、20002、20004は、羨道第1面の床面から出土した。001、002は完存品であるが、002の方が、001の下から出土しており、蓋をした状態ではなかった。

20002は、坏蓋Ⅳ類である。平たい天井部に短いかえりがつく。かえりは、受部より低い位置にある。天井平坦部にヘラ削りを施す。内面天井部は、静止位置での、不定方向のナデが見られる。20001は、坏身Ⅲ類である。口縁は外反する。底部と口縁部の境は丸味を帯びている。底部の若干内側に、外へ踏張り気味の高台がつく。高台は貼付である。内外面ナデ調整で、底部は、静止ナデが施されている。20004は、土師器の盤である。精良な胎土を用いている。内

Fig. 9 2 号墳石室実測図 (1:50)

外面を丹塗研磨し、内面には粗い暗文を施す。20008は、破片資料で疑問であるが、坏身 I a ないし I b 類であろう。20003は、平底の坏身 II 類である。底部は、ヘラ切り未調整、内外面 回転ナデ、内面底部は静止ナデが施される。

20006は坏蓋Ⅱ a 類である。天井部と口縁の境に、鈍い段がつき、口縁端面は面取りされて、凹線状に凹む。外面の段から上部にヘラ削りが施される。20005はⅡ b 類である。外面½程度をヘラ削りする。口縁内面には鈍い段がつく。20010、20009は坏蓋Ⅲ類である。010は器高が低く、底部から½程度をヘラ削りする。かえりは受部より低い位置にある。007は、やや口径が小さく器高が高い。鈕がつくものかも知れない。外面を約½ヘラ削りする。かえりは受部よりわずかに低い。

20009は、土師器把手である。断面は扁球形である。

20010は墳丘表採、他は、玄室から羨道を清掃中に出土した、埋土中のものである。

② 鉄器 (Fig.11、PL.30)

2号墳出土の鉄器には、工具、武器がある。

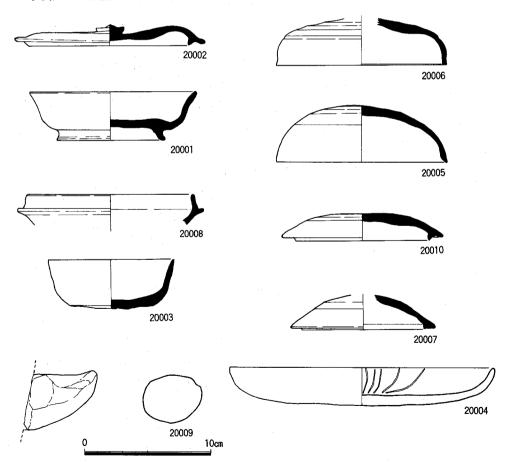


Fig. 10 2号墳出土遺物実測図(1)(1:3)

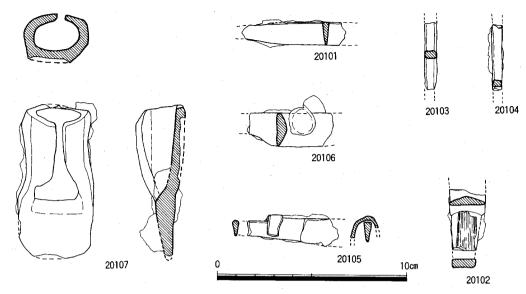


Fig. 11 2号墳出土遺物実測図(2)(1:2)

武器 (20104、20103) 鉄鏃の茎片が 2 点出土している。断面形は四角形である。幅は 20103が0.7cm、104が0.5cmである。残存長は103が3.5cm、104が3.4cmである。

工具 工具には、刀子、鉄斧、鉇がある。

毎(20102) 20102は、鈍の関部から茎にかけての部分と考えられる。刃部の断面は扁平な二等辺三角形である。短い関部から段をなして茎部がとりまく。茎の断面形は長方形である。表面には木質が残る。茎幅0.9cm~1.6cm。関幅1.8cm。

刀子 (20105、20106、20101) 20105は刀子の茎から関にかけての部分である。柄金具が付着する。茎幅0.8cm、関幅1.1cmである。柄金具は幅0.7cmである。玄室右側壁付近から出土した。20106は、銹化がすすみ、本来の形がわかりにくいが、刀子の茎から関にかけての部分と考えられる。茎幅1.1cm、関幅1.6cmである。玄室右奥隅付近から出土している。20101も刀子の刃部片である。細くなっていく方が茎の方である。刃部幅1.2cmである。

鉄斧(20107) 20107は鉄斧である。刃先を若干欠く。刃部幅3.9cmである。袋部は、幅3.6cm、高2.6cmの楕円形で、5.0cmの深さがある。袋部の先端から、刃部がやや広がる。玄室奥壁に刺さった状態で出土した。

出土位置を示したもの以外は、20101が羨道埋土、他は玄室埋土出土である。

- ③ 装身具 (Fig.12、PL.33)
- 2号墳出土の装身具には、耳環、銀環がある。

耳環(20201) 20201は、長径2.8cm、短径2.7cmの銅胎部分が残る。銹化が著しい。断面は、 長径0.7cm、短径は0.5cmである。羨道の第2面の敷石面の出土である。

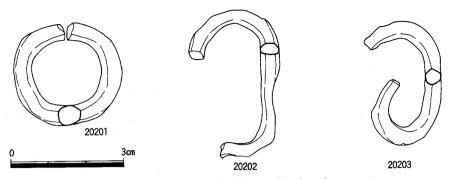


Fig. 12 2号墳出土遺物実測図(3)(1:1)

銀環 (20202、20203) 銀製の楕円形の環である。20202は、広げられていると思われ、20203は、ねじ曲げられている。20202は長径4.0cm、短径2.3cm、20203は長径3.3cm、短径2.0cmである202は玄室中央付近、203は右奥隅付近の出土である。

3. 第3号古墳。

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3)

3号墳は、2号墳の北東に位置する。墳裾の最も近い所で、2号墳から3.5m離れている。墳丘の南側に、自然流水による溝が掘られている。この部分を墳丘に含めて考えると、径12mのほぼ円形の墳丘となるが、含めずに考えると10m×12mの卵形の墳丘となる。墳裾からの比高差は、最大で3.25mである。現状では、E群最大の規模をもつ古墳である。

② 石室 (Fig.13、PL.6、7、8)

石室は、単室で両袖型の横穴式石室である。主軸をN-54°-Eにとり、西側に開口する。 玄室は、やや奥行の方が長いが、ほぼ正方形である。玄室規模は奥壁幅2.0m、左側壁幅2.1m、 右側壁幅2.5m、天井までの高さ2.2~2.4m、全壁高1.0mである。玄室内は盗掘のため奥壁側 は、腰石の根石が露出するまで掘り込まれている。しかし、玄門側では、馬具(轡)、刀子、 鉄鏃などの鉄器が出土している。

奥壁は、巨大な箱形の転石1個を腰石とし、天井までほとんど垂直に積み上げる。奥壁中央に不定形の大きな転石を用いているので雑然と見えるが、横に目地をとおしたものであろう。 左側壁は2個の腰石を据え、その上に、比較的形のそろった大ぶりの石で、整然とした煉瓦積みを行う。4段目から急激に持ち送って天井に至っている。右側壁は、巨石を1個腰石にすえ、縦横の目地をそろえながら、6段積み上げている。4段目から若干持ち送って天井に至る。この持ち送りの角度が左右で異るために、右側壁側(尾根側)に若干傾いた横断面形となっている。玄門は大ぶりの転石2個を袖石とし、その上に2段積んで楣石を架ける。それからほぼ垂直に積みあげて前壁を構築し天井に至る。従って、玄室の縦断面形は、方形に近い。棚石から

楣石までの高さは1.1mである。天井は2枚の石を架けて構築されている。

羨道は、梱石から測って約3.0mである。梱石のすぐ西側と、開口部付近に、地山中の巨大な転石が露出し、羨道の床面を規制している。壁面は、玄室に比べると、石も小さめでやや雑な感があるが、羨道左側壁は縦方向の目地が、比較的通っている。

閉塞施設は、二つの大石の間に築かれている。一枚の平たい板石を内側に立て、その背後を 角礫で充填したものであろう。

閉塞前面の、開口部付近からは、鉄滓が供献されているのが確認された (Fig.14、PL.8-2)。 地山の大石の上を中心に、須恵器环蓋1個と、鉄滓が散布している。鉄滓は、ほとんどが精煉 滓であるが、鍛治滓もわずかに含まれている。

鉄滓を供献する古墳は、1977年に集成された段階で福岡市周辺で32例あり、早良平野周辺では19基を数える。その後も調査例の増加に伴って類例が増加し、1982年の集成では、70基、早良平野周辺に限っても49基と、分布の一大中心をなしている。それ以後も、羽根戸古墳群 N 群、E 群、広石古墳群、笠間谷古墳群等で鉄滓供献墳が発見され、まだまだ増加していくものと思われる。この集中傾向は調査例の増加に伴うところも大きいが、この地域が、鉄生産を主要な生業としていたことを示しているとされている。

(3) 出土遺物

3号墳からは須恵器、鉄器、玉類が出土している。原位置に近いと思われるのは、羨道部で 鉄滓と一緒に出土した須恵器(30001)である。玄室内からは鉄器が多数出土しているが、玄 室内は荒らされており、原位置かどうかは極めて疑問である。

① 土器 (Fig.15 PL.23、24)

出土土器はすべて須恵器であり、器種には坏身、坏蓋、器台がある。

坏身Ⅰa類(30006) 30006は、かえりの立上りが比較的高く、径が大きいⅠa類である。 ヘラ削りは、上半はナデ消されるが、%程度まで施されている。

坏身 I b 類(30002、30003) 30002は、基部が厚く、端部が尖る断面三角形のかえりをもつ。 外面のヘラ削りは、½程度まで施される。底部は丸みを帯びる。30003は、底部がかなり平た くなっている。かえりは断面三角形である。ヘラ削りは外面½程まで施される。

坏身Ic類(30007) 30007は、異形の坏身である。かえりは短く内傾する。受部径は、9.5cmと、極めて小形である。また口径に比べてやや深めの器形である。底部はヘラ切りのままである。

坏蓋Ⅱ a類(30001、30004) 30001は羨道出土の坏蓋である。口縁外面に沈線状の鈍い段がつき、口縁内面にも鈍い階がつく。ヘラ削りは外面%程まで施されていると思われる。30004も、外面に沈線状の段がつく。口縁内部にも段がつく。ヘラ削りは½程度まで施される。いずれも、天井部が丸くなって、また、口縁部との境も不明瞭になっているⅡ a 類である。

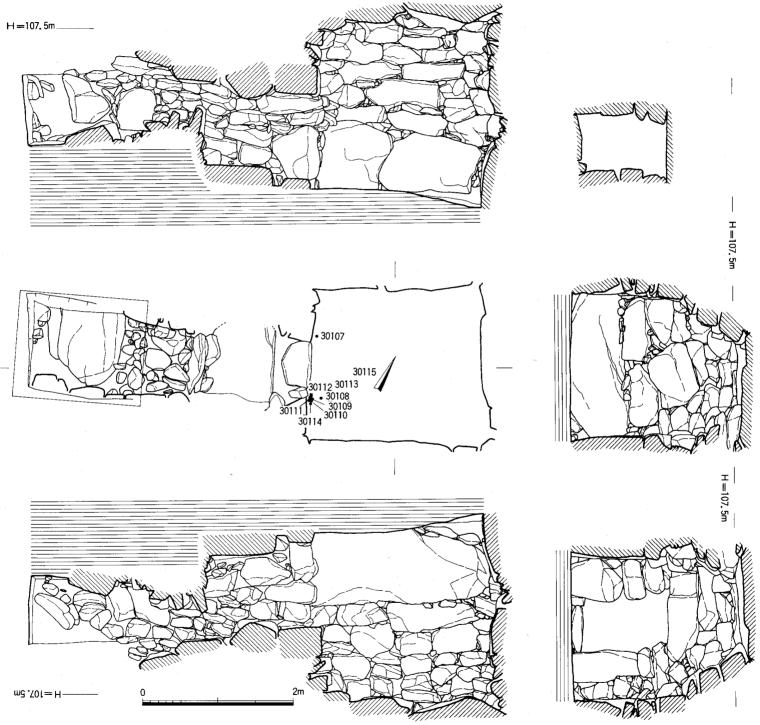


Fig. 13 3号墳石室実測図(1:50)

坏身Ⅱb類(30012) 30012は、破片資料であるが、Ⅱb類と思われる。口縁部内面に鈍い 稜線がめぐる。

坏身Ⅱc類(30005、30014、30013) 005、014、013の3個は、径がやや小ぶりで、ヘラ削りが天井部付近にのみ施され、平坦になる。口縁部はやや内湾気味に屈曲する。Ⅱc類である。

その他の器種 30008は器台の接合部と思われる。内外面とも回転ナデである。30009は、器台か、あるいは、台付壺等の台付土器の脚部である。脚裾はあまり広がらず、屈曲部をもつ。透かしは、長方形である。破片資料であるので、何ヶ所に施されているかは不明である。調整は、内外面回転ナデである。

30001以外はすべて、羨道部の埋土内からの出土である。

② 鉄器、装身具類 (Fig.16、17、PL.31、33)

3号墳は、玄室床面から鉄器が多数出土している。出土した鉄器には武器、工具、馬具がある。 武器 武器には、弓金具、鉄鏃がある。

弓金具(30104) 弓の留金具である。棒状部の両端に玉状の頭部がつく。図上で、上側の 頭部は叩いて、扁平につぶされている。棒状部には木質が付着している。長3.4cm、幅0.5cmで ある。

鉄鏃 (30101、30102、30103、30105、30109、30110、30112、30113、30114、30115) 鉄鏃 は、破片数で10点出土している。

鋒部の残っているものは30101、30114、30102、30112がある。30101は広根式の関部で、斧 箭式になる可能性もある。関幅1.1cm、茎幅0.9cmで、茎の断面は扁平である。30102は、片刃

30114、30112は、鑿箭式である。112は両丸造で、鋒部がやや広めである。鋒長2.6cm関幅1.1cm。114は片丸造である。鋒 郡長2.3cm、関幅0.8cm。

箭式の鋒部である。刃幅1.0cm。

30109、30110は茎の篦被の部分である。30109は篦被幅0.8cm。30110は篦被幅0.7cm。いずれも断面は四角形である。

30113は茎の端部である。端部は尖り気味に仕上げられている。幅は0.3cmである。

30103、30105、30115は茎の

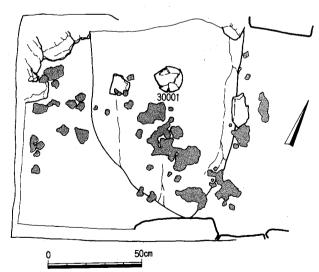


Fig. 14 3 号墳遺物出土状況図(1:20)

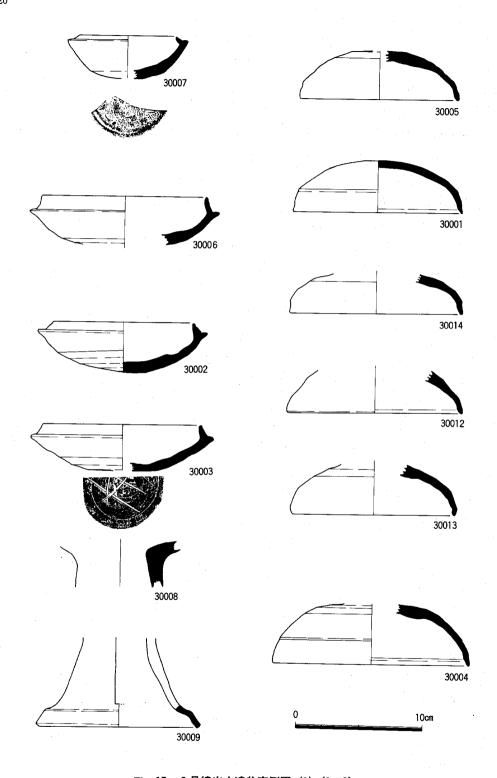


Fig. 15 3 号墳出土遺物実測図(1)(1:3)

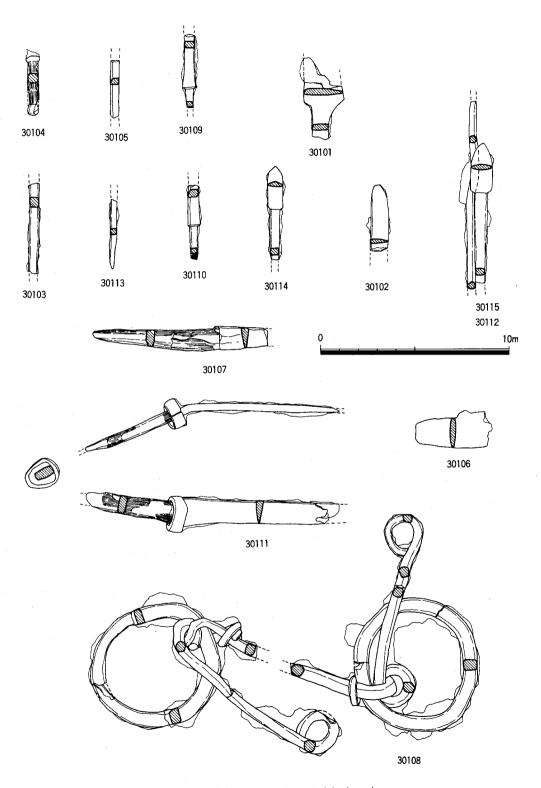


Fig. 16 3 号墳出土遺物実測図 (2) (1:2)

Fig. 17 3 号墳出土遺物実測図 (3) (1:1) 破片である。

工具 (30107、30111、30106) 30107、30111はいずれも刀子である。 107は茎に木質が残る。111は、関から大きく折れ曲がる。柄金具が付着する。茎に木質が残る。30106は不明であるが、利器の関の部分であろうか。

馬具(30108) 轡金具が出土している。円環形の鏡板に、引手金 具と、銜金具が同じ所にとりつけられている。立聞はつかない。鏡板 の径は6.5~7.0cmで、断面は方形である。

30202は、ガラス製丸玉である。玄室埋土出土。

4. 第4号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3 PL.9-1)

4号墳は、3号墳のすぐ南東側にある。墳丘の最も近い所で、1.8mと近接している。墳丘は現状では、約7mの円墳であるが、南側の尾根側では現状の裾部と墳頂の比高差がほとんどなく、2号墳と同様に尾根上から流れ込んだ土砂で埋め立てられていると思われる。北側の最も落差の大きい所での、墳頂との比高差は1.75mである。

(1) 石室 (Fig. 18 PL.9、10-1)

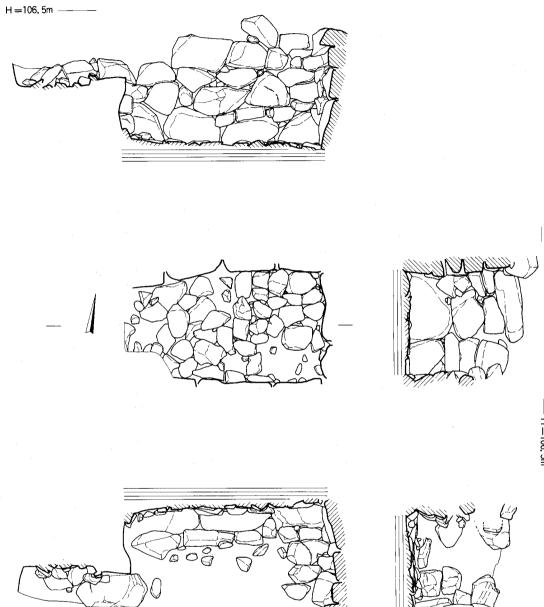
石室は、単室で両袖型の横穴式石室であるが、天井を失い、また、右側壁と玄門、前壁のほとんどを失い、大破している。主軸の方向をN-82°-Eにとり、西側に開口する。

玄室の規模は、奥壁幅1.4m、右側壁幅2.0m以上、左側壁幅2.2mであり、やや玄門にむかってすぼまり気味の長方形である。高さは、奥壁の現在高1.5m、左側壁の現在高1.6mである。壁面には明確な持ち送りは見られない。

玄室の構築は、他の古墳に比べて腰石が小さめなのが特徴である。奥壁では、2個の腰石が やや大きいが、ほぼ同じくらいの大きさの転石を積み、縦に目地が通っている。左側壁は、腰 石に4個の転石を使うが、上に積まれている石と大きさはほとんど変わらない。これらの石を、 煉瓦積みで積み上げる。右側壁でも、上部の方の浮いた小転石は、裏込石が露出したものであ り、壁面の構築は、左側壁と同様なものであったと考えられる。

玄門は、右袖石と前壁を失う。左袖石は2段分遺存している。玄室床面は、敷石が良く遺存 していたが、遺物は出土していない。羨道は、落石の危険があるため未調査である。

4号墳からは、玄室内埋土より、図示に耐えない須恵器、土師器片数点以外は、遺物が出土していないが、比較的小さい石を使った長方形石室は、最近調査された羽根戸古墳群B群第4号墳、羽根戸南古墳群E群第4号墳等に類例があり、いずれも6世紀前半頃の須恵器を出土しまは。 ているとのことである。羽根戸古墳群周辺では、古い段階に属する石室である。これらの類例



4 号墳石室実測図(1:50) Fig. 18

mg = 901 = H = 100

から推測すると、袖石は、現状以上にそう高くならず、羨道は短く、若干開き気味になるもの が考えられる。

5. 第5号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3 PL.11-1)

5号墳は、4号墳から少し離れて東側にある。墳丘裾の最も近い所で測ると、17.5mほど離れている。

現状での墳丘は、東側がやや出っ張るが、ほぼ墳丘径8mの円墳である。しかし2号墳、4 号墳と同様に南側は、尾根からの流上で若干は埋め立てられている可能性がある。墳丘裾と墳頂の比高差は、尾根側で1m、谷側で3mある。

(2) 石室 (Fig. 20 PL. 10-2、11、12)

石室は、単室で両袖型の横穴式石室である。主軸をN-82°-Eにとり、西側に開口する。 玄室は、ほぼ方形であるが、不定形の腰石の形に左右されて、多少歪んでいる。

玄室の規模は、奥壁幅2.0m、右側壁幅2.0m左側壁幅2.4m、天井までの高さ2.1m、前壁高1.0mである。玄室内は、過去の盗掘のため、腰石の根石が露出するまで振り込まれている。

奥壁は、巨大な箱形の転石 1 個を腰石とし、大ぶりの石で 7~8 段積んで天井に至る。持ち送りは 4~5 段目から見られ、前壁の 2 段目の高さにほぼ対応する。天井に近くなるにつれて、石の大きさを減じていく傾向が見られる。ほぼ、横に目地がとおっている。なお、Fig. 20では、左側壁が玄門に向かって開いているため、左側壁の奥半分が見通されているが、腰石から天井中央に至る、大ぶりの石の左側輪郭線が、ほぼ左側壁と奥壁の境界線である。

左側壁は大ぶりの腰石 2 個を据えているが、長さが足らず、袖石近くは、小さな石を 2 段積んで、その上に腰石と同じくらいの大きさの石を積むという、不自然な積み方をしている。そのため楣石の高さ付近までは、大ぶりの石を用いている割には、目地が通っていない。しかし、天井近くは石は小さくなるが、ほぼ横に目地がとおる。下半は外傾が著しく、断面図での四段目から急激に持ち送る。右側壁は、高さ 1 m近い巨石 2 個を腰石に据え、そのすぐ上から除々に持ち送って天井に至る。目地はほぼ横に通る。このように、左右両側壁で、持ち送り方が異なるために、玄室の横断形はかなり谷側へ傾いている。そのため、右側壁は、石室中軸近くまでせり出しており、天井が谷側へ大きく傾いて架けられるという結果となっている。側壁の腰石下面のレベルを見ると、約20cm右の方が高く、また、両袖石下面のレベル差も、右袖の方が20cm程高い。この傾斜が影響しているのであろうか。

玄門は、大ぶりの石 2 個を袖石に据え、上に 2 段積んで楣石を架け、その上の前壁は、右側壁に押されて大きく谷側へ傾きつつ、 5 段で天井に至る。梱石の中心と、楣石の中心は約20cmずれている。

羨道は、閉塞施設の外側はかなり壁が落ちているが、梱石から2m程が復原できる。閉塞施設は、玄門部の第3梱石から30cm程離れた第2梱石と、1.1m程離れた第1梱石の間に角礫を充填して構築されていたと思われ、高さ30cm程が残存している。

(3) 出土遺物

5号墳からは、須恵器、鉄器、耳環、玉類が出土した。現位置をとどめるものはない。

① 土器 (Fig.19 PL.24)

出土土器はすべて須恵器である。坏蓋、坏身、甕(?)がある。

坏蓋(50004、50001) 50004は丸い天井部をもち、口縁内側に鈍い段がつく。ヘラ削りは ½程度まで施されるようである。 Ⅱ b 類。50001は、平坦な天井部に屈曲する口縁部をもつ。 ヘラ削りは½程度まで施される。 Ⅱ c 類。

坏身(50003、50002) 50003は、かえりの立上りは高いが、小形である。ヘラ削りは½以下で粗い。類別に迷うが、Ib類としておく。50002は、大形で、かえりの立上りも高い。ヘラ削りは¾程施される。Ia類である。

甕(50005) 50005は甕としたが、底部が平底に近く、底部にまでカキ目が施されるなど疑問な点も多い。あるいは、横瓶など、別の器形になるのかも知れない。調整は、まず平行叩きを外面に施す。内面にはこの時の同心円文の当て具底が残る。その後底部にまでカキ目を施す。

② 鉄器 (Fig.21 PL.30)

5号墳からは鉄鏃が2点出土している。50101は面丸造の鑿箭式である。関幅1.0cm、茎幅0.6cm

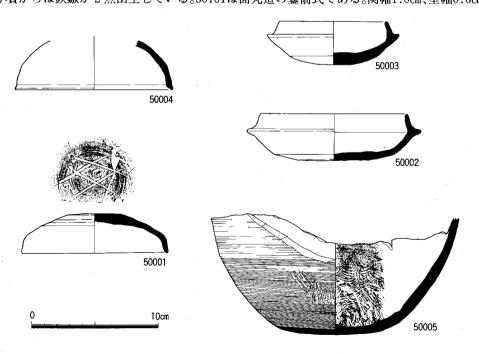
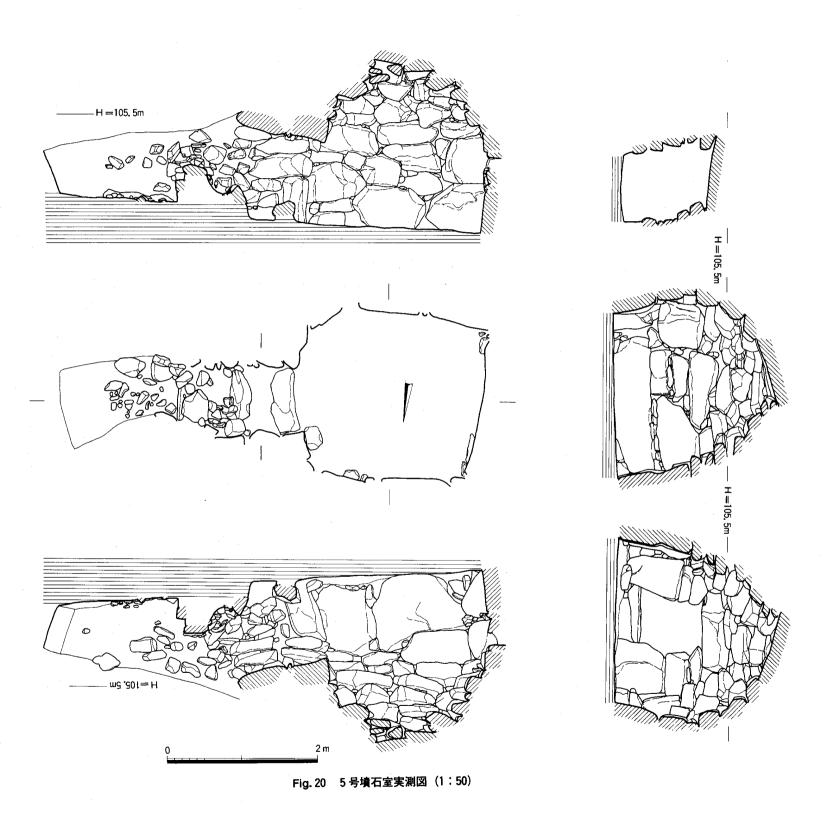
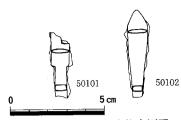


Fig. 19 5号墳出土遺物実測図 (1) (1:3)





である。50102は、両丸造無関鑿箭式である。鋒長3.7cm、鋒部 幅1.1cmである。

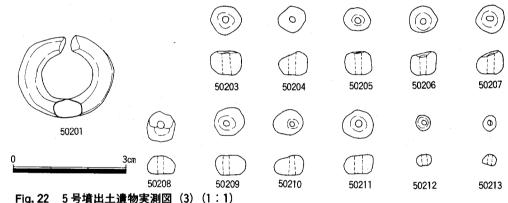
③製身具類 (Fig.22 PL.33)

50201は、銅胎金箔の耳環で、ほぼ全面に、金箔がよく残っ ている。長径2.5cm、短径2.3cmである。断面は、長径0.8cm、 短径0.5cmの楕円形である。

5号增出土遺物実測図 Fig. 21 (2) (1:2)

50203~50211は、ガラス製の丸玉である。径0.7cm~0.8mm厚さ0.5~0.6cmほどで、ほぼ同形 同大である。風化のため、表面は黒色化して、もろくなっている。

50212、50213は、小玉である。50212は材質がよくわからない。紅色をしている。径0.4cm、 厚さ0.3cmである。50213はガラス製の小玉である。明るい緑色をしている。径0.4mm、厚0.3cm である。50201、50203が羨道埋土からの出土で、他は玄室埋土からの出土である。



6. 第6号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3 PL.13-1)

6号墳は、5号墳の北東に位置する。墳丘裾の最も近い所で4.5m離れている。墳丘は現状 で約8mの円墳である。墳丘裾と墳項の比高差は尾根側で0.5m、谷側で1.25mである。尾根 側の比高差が小さいのは、流土の埋め立ての可能性もある。

(2) 石室 (Fig. 23 PL. 13-2、14-1)

石室は、単室両袖型の横穴式石室である。天井部を失う。主軸の方向をN-87°-Eにとり、 西側に開口する。

玄室は、奥壁幅1.5m、左側壁幅2.0m、右側壁幅2.1mの長方形であり、敷石が帯状に遺存 している。奥壁、左側壁は、腰石が特に大きいということはなく、3個の腰石の上に、同程度 の石を横方向に目地が通る煉瓦積みにしている。右側壁は、やや大きい石を2個腰石に据え、 その上に、ほぼ横に目地がとおる煉瓦積みで築いている。各壁の現存高は、奥壁1.7m、左側 壁1.8m、石側壁1.3mである。持ち送りは、奥壁では見られず、左側壁で若干見られる。右側壁で壁石がせり出しているのは、崩落のためと思われる。玄門は、右袖石はやや大きな石を据えているが、左袖は小ぶりの石を3段積む。上面のレベル差から見て右袖にももう1段積んで、その上に楣石を架けて玄門を構築したと思われる。閉塞は、梱石のすぐ前面に角礫を積んで構築されている。羨道は1.0m程遺っているが、これ以上大きく延びることはないと思われる。

6号墳石室の形状は、4号墳に共通するところが多い。また、羨道から玄室へ一段低くなっているのも古い要素といえる。しかし、腰石や袖石がやや大きいところなど、やや新しい要素が見られる。出土した須恵器(Fig.24)のうち、最も古手の特徴をもつ60001は、羽根戸B-4号墳出土の須恵器より、やや新しいようである。E-4号墳についで古い段階に属する古墳の可能性が高い。

(3) 出土遺物

- ① 土器 (Fig.24 PL.24)
- 6号墳から出土した遺物はすべて須恵器であり、図示することのできた遺物は8点にすぎない。器種には、坏蓋、坏身、壺(?)がある。

坏身(60007、60008) 60007は、坏身の口縁部破片である。かえりの立上りは内傾しながらわずかに外反する。口縁端に至る程薄く仕上げている。かえりと胴部の境は、内面でも明瞭な稜線がつく。坏身 I b 類である。

60008は、かえりの立上りが短く内傾する。受部は外側へ突出する。受部の推定復原径は13.6cm である。 かえり部と胴部の境は、内面でも明瞭な稜線がめぐる。 回転へラ削りは、底部からが 程までに施されている。 坏身 I c 類である。

坏蓋(60001、60002、60003) 60001は口縁部と天井部の境に沈線状の段がある。段から天井部にかけてヘラ削りが施される。口縁部内面にも沈線状の段がめぐる。I類の坏蓋と考えられる。60002は、小片で径に若干疑問があるが、やや大きめであるのは間違いない。回転ヘラ削りは、下半はナデられて稜は不明瞭であるが、½程度まで施される。天井部がやや平坦気味ではあるが、坏蓋Ib類であろう。

60003は、大きめの器形で、復原口径14.2cmになる。しかし、平坦な天井部をもち、口縁部で屈曲し、口縁端が直立する。また回転ヘラ削りが、天井部にしか施されない。これらの点で 坏蓋Ⅱ c 類の特徴を備えている。

60005、60004はそれぞれ小片ではあるが、坏蓋Ⅱ類の口縁部である。

壺(60006) 60006は口縁部破片である。壺と考えられるが確かではない。口唇部には強い 回転ナデによる凹縁がめぐっている。調整は、内外面回転ナデである。

出土位置は60001、002、005、006が玄室、004が羨道部のそれぞれ埋土出土、003が閉塞部出土、007、008が墳丘表採品である。

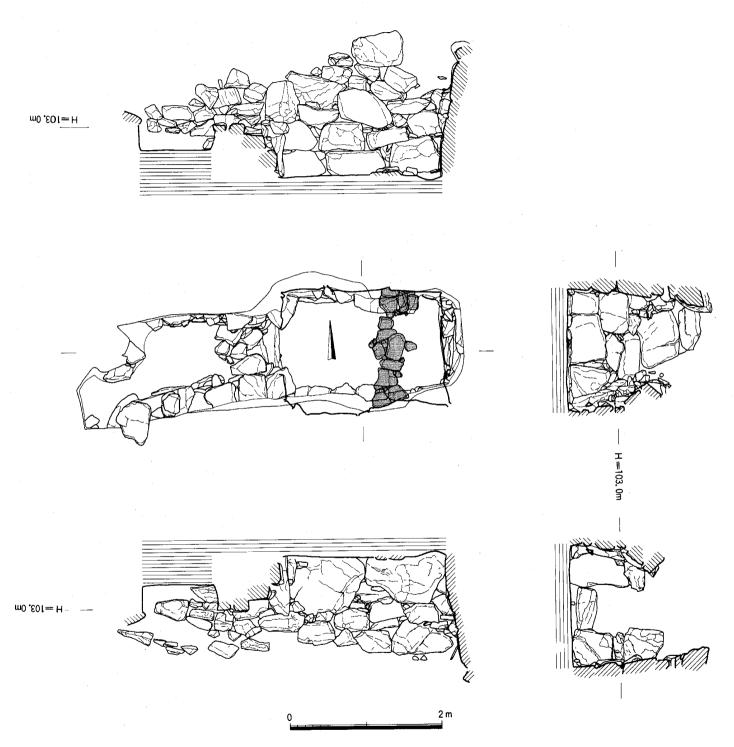


Fig. 23 6 号墳石室実測図(1:50)

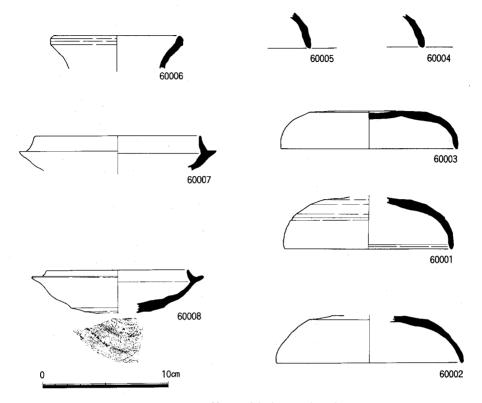


Fig. 24 6 号墳出土遺物実測図(1:3)

7. 第7号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3 PL.14-2)

7号墳は、6号墳からやや離れて東側に位置する。墳丘裾の最も近い所で、26.5m離れている。現状では径7mの円墳であるが、南側は流土の埋め立ての可能性がある。墳丘裾と墳頂との比高差は、尾根側で0.25m、谷側で2.5mである。

(2) 石室 (Fig.25 PL.15、16)

石室は、単室両袖型の横穴式石室である。主軸をN-77°-Wにとり、西側に開口する。玄室に奥壁幅1.6m、左側壁幅2.3m、右側壁幅2.2mの長方形である。敷石が右奥隅に若干遺存している。天井までの高さは2.0m、前壁高は0.7mである。

奥壁は、大ぶりの転石2個を腰石に据えて4段積み、5段目から石の大きさを減じて持ち送り、天井に至る。ほぼ横に目地が通る。

左右側壁は、やや小さめの腰石の上に3~4段積み、石の大きさを減じて持ち送り、天井に 至る。横方向に目地がとおっている。

玄門は、大ぶりの袖石 2 個の上に右袖は 2 段、左袖は 3 段積み、楣石を架けて構築されている。また梱石は、小転石 4 個を 2 段 2 個ずつ並べ積まれている。梱石から楣石までの高さは、0.8mである。

前壁は、大ぶりの楣石の上に4段積んで構築される。持ち送りは3段目から急激に行われている。

羨道は、壁面がかなり崩れ落ちているが、梱石から1.5m程が残っている。若干「ハ」の字 形に開いていくものと思われ、現状以上にそう伸びることはないであろう。

7号墳の平面形は、長方形プラン「ハ」の字形の短い羨道など、4号墳、6号墳に類似する 点が多い。また、側壁の腰石に、上部と比べて特に大きさの違わない石を用いているのも共通 している。しかしまた、奥壁の腰石は大型化してきており、また玄室上半の持ち送りの形状は、 3号墳、5号墳等に共通しており、新しい特徴も持っている。

なお、閉塞施設はすでに跡形なく失われている。しかし、羨道が短く、現状での開口部から、 0.6mの位置まで羨道部天井が覆っており、梱石からの間は0.9mである。従って、先に述べた ような石室の特徴から、6号墳に類似した閉塞施設が考えられよう。

(3) 出土遺物

7号墳からは、須恵器 土師器、玉が出土している。多くは玄室埋土からの出土である。

① 土器 (Fig.25 PL.25)

出土土器には須恵器、土師器がある。器種には、坏身、坏蓋、甕がある。

坏身 I a 類 (70008) 70008は、かえりの立ち上がりが直に近く高い。また口縁端で薄くならず、端部は丸くしあげられる。内面のかえりと胴部の境には稜がつかない。ヘラ削りは、外面%程にまで及ぶ、受部径は16cmである。

坏身 I b 類 (70005、70007) 70005は、かえりが薄く立ち上りが低く内傾する。端部は尖り気味に丸く仕上げられる。内面のかえりと胴の境は、かなり明瞭である。ヘラ削りは外面½程の範囲に施される。受部径は推定復原で17cmである。受部が突出するが、大きさ、かえり、ヘラ削りの特徴から、I b 類に含められよう。70007は、かえりが薄く、端部を尖らせる。かえりと胴部の内面の境界には稜がたつ。ヘラ削りは外面½程度に施される。受部径は15.4cmである。

坏身 I c 類 (70006) かえりの立ち上りが短く、断面三角形で内傾する。受部は突出する。 内面のかえりと胴部の境には稜がたつ。回転ヘラ削りはタタ程におよぶ。受部径は14cmである。 I b 類とすべきかもしれないが、かなり小形化している点を重視して、一応 I c 類としておく。 **坏蓋 I a 類** (70002、70003) 70002は天井部と口縁部の境に沈線状の段がつく。口縁内面 の段はなく端部は丸く調整される。ヘラ削りは、天井から½程度と思われる。70003は、天井

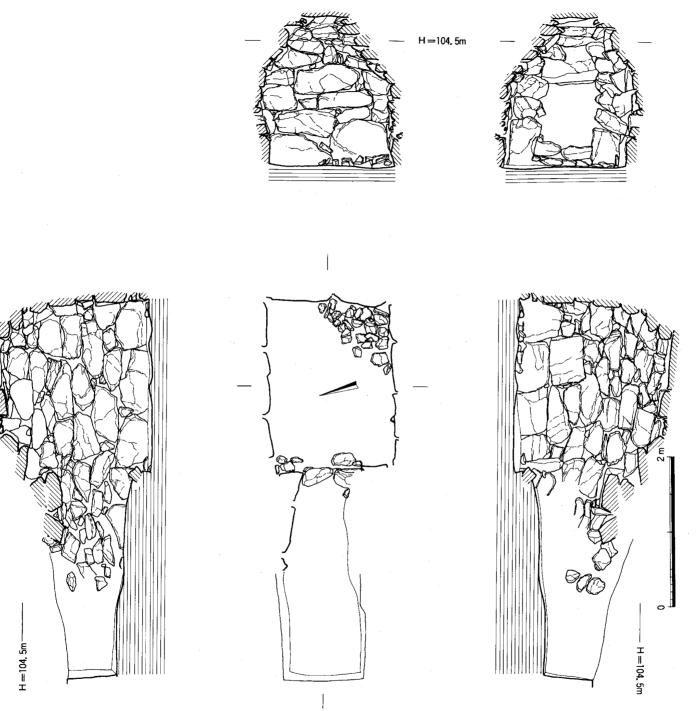


Fig. 25 7号墳石室実測図 (1:50)

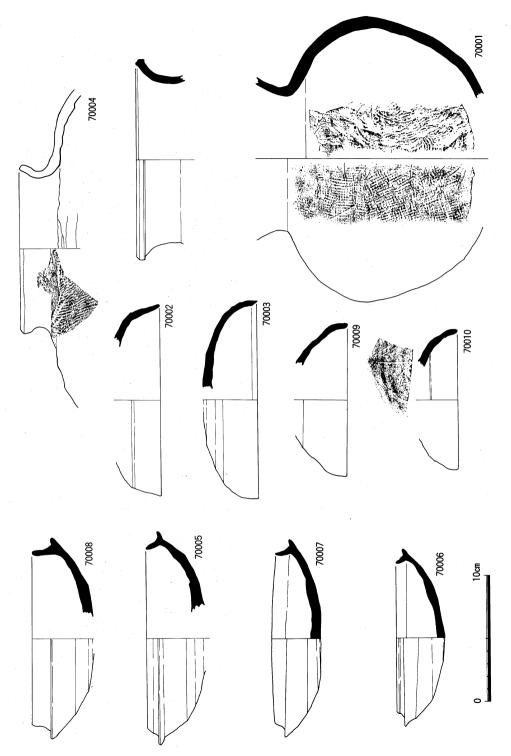


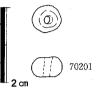
Fig. 26 7号墳出土遺物実測図(1)(1:3)

部と口縁部の境は不明瞭である。口縁内部に段がつく。へう削りは½程に施される。

5.7 ★ I c 類 (70009、70010) 70009は小形で、口縁端部が屈曲する。ヘラ削りは、天井か ら¼程である。70010は、遺存部分にはヘラ削りは見られない。

70001の口縁部と胴部は、焼成、色調から同一個体と考えられるが、接合部が なく、別個に図示した。口縁端部は三角形に面取りされる。頸部は内外面回転ナデ調整される。 胴部は扁球形で、外面は平行叩き、内面は、同心円文の当て具痕が残る。

短く外反する口縁部に強く張る肩部をもつ甕である。胴部外面は平行 土師器甕(70004)



叩き、内面はヘラケズリされる。この時期の土師器甕には見ら れない器形であり、いわゆる「擬須恵土師器」と考えられる。

②装身具類 (Fig.27 PL.33)

Fig. 27-70201は、ガラス製の丸玉である。径0.7cm、厚0.5cm 7号墳出土遺物実測図で、色はコバルトブルーである。玄室埋土内出土。

Fig. 27 (2) (1:1)

8. 第8号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3)

8号墳は、7号墳のすぐ北側にある。墳丘裾部の最も近い形で測ると、約3m離れている。 墳丘は、北側を一部削平される。現状から判断すると、墳丘径9m程の円墳となろう。墳丘 裾から墳頂までの比高差は、尾根側で1.0m、谷側で2.25mである。

(2) 石室 (Fig. 28 PL.17、18)

石室は、単室で、両袖型の横穴式石室である。主軸をN-72°-Wにとり、西側に開口する。 玄室は、若干奥へ開き気味の方形である。玄室規模は、奥壁幅1.25m、左側壁幅1.9m、右側 壁幅2.1m、天井までの高さ約2m、前壁高0.7mである。玄室内は、過去の盗掘により、玄室 中央付近が掘り凹められているが、左袖付近と、右奥隅には敷石が残っている。

奥壁は、不定形の転石 3 個を腰石に据え、すき間を小ぶりの転石で埋めながら、 2 ~ 3 段目 で目地を整え、腰石から8段で天井に至る。持ち送りは5段目から行われている。持ち送りの 部分の石は、若干下半部より小さめである。

左側壁は、大ぶりの転石2個を腰石に据え、ほぼ横の目地を通しながら、8段積まれる。5 段目から持ち送られて天井に至る。右側壁は腰石を3個据える。奥壁の腰石は扁平で、2段積 んで他の2個の高さに合わせてある。しかし、その上は、石の大きさがまちまちであり、とく に玄門側と奥壁側で、使っている石材の大きさにかなり差がある。そのため、目地の通らぬ雑 然とした積み方となっている。しかし持ち送りの始まる境界(断面上で4段目)は比較的よく 目地が整っている。各壁面の持ち送りの始まるレベルは、ほぼ同じで、奥壁から両側壁にほぼ 一線に目地が通るといえ、玄門袖石の最上段に相当する位置である。

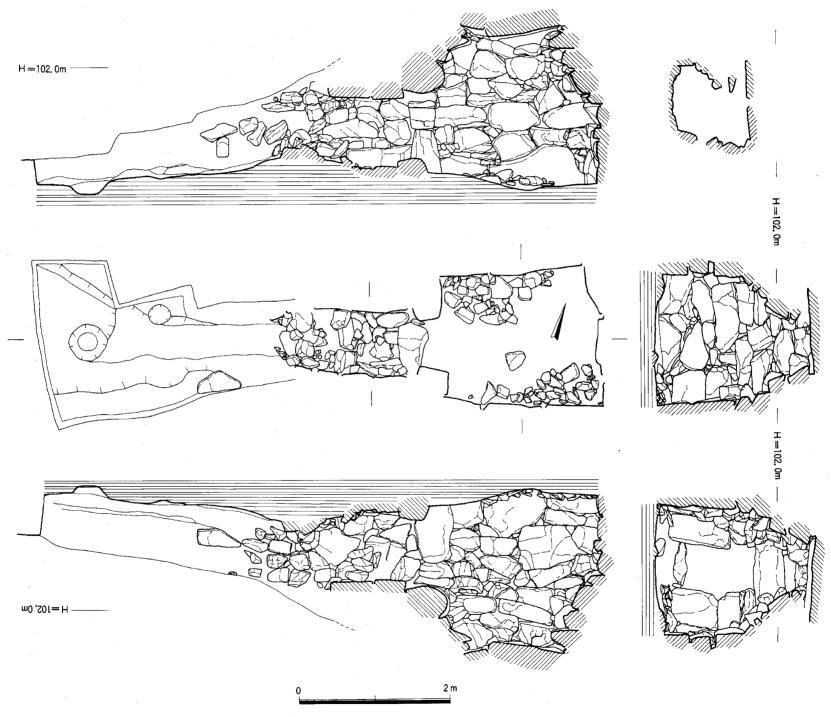


Fig. 28 8号墳石室実測図 (1:50)

玄門は、大ぶりの転石 2 個を両袖石に据え、その上に 2 段積んで楣石を架ける。前壁は、楣石のすぐ上から持ち送られ、 2 段で天井に至る。梱石から、楣石までの高さは0.85mである。梱石は、両袖石から若干羨道側へずれておかれている。

羨道は、梱石から2.2~2.7mの部分であろう。壁面がよく残っているのは1.9m程度である。 羨道床面には、敷石が見られ、その直上に、供献の須恵器が、ほぼ原位置に近いと考えられる 状態で出土した。これらについては、遺物の項で詳しく述べる。また羨道埋土からも、完存の 身3点が出土しているが、出土レベルが高く敷石面の土器と共伴とは考えられず、またこの レベルでの埋葬面も認められないので、原位置とは考えられない。

閉塞施設は、供献須恵器群のすぐ外側に、扁平な石を3枚程立て、その背後を角礫で充填し て構築したものと思われる。根石に近い部分が、約1mにわたって残存している。

(3) 墓道

羨道は、閉塞外にも若干延びた可能性もあるが、その外側で、玄室清掃のためのトレンチを入れていた所、須恵器破片が多数出土した。そこで、土器の散布範囲の確認のため、トレンチを広げた所、墓道が確認された。石室主軸から、北の方へ曲がって、谷筋へ降りていくと考えられる。

- (4) 羨道内出土遺物
- ① 出土状況 (Fig.29 PL.9)

羨道出土の須恵器群は、梱石のすぐ前面に羨道右側壁に接しておかれていた。中軸に近い方が破片が多く、積み重ねが多いのは、若干動かされているのかも知れない。

出土した須恵器の器種は、坏身、坏蓋、高坏蓋、器台がある。蓋坏3組が、蓋を被せた状態で出土した。3組いずれも内蔵物がある。80011には魚骨(付編参照)、80005から鐙金具、

80014からは、鞘口金具、釘が出土 している。また80007、80008内には、 鐙金具、80003内には鍔金具が収め られていた。

② 土器 (Fig. 30、31 PL. 26) 坏蓋 (Fig. 30)

坏蓋 I b 類 (80010、80004、80013) 80010は、80011に被せられていたものである。体部はやや浅い。□縁内面に凹線がめぐっている。ヘラ削りは胴部½程の範囲に施される。80004は、80005に被せられてい

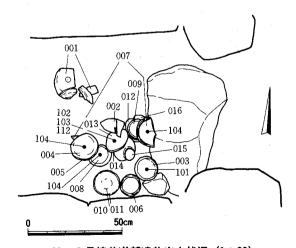


Fig. 29 8 号墳羨道部遺物出土状況(1:20)

た。口縁内面に沈線状の段がめぐる。回転ヘラ削りは胴部の½程まで施される。800013は、800014に被せられていた。口縁がやや屈曲する。ヘラ削りは天井部から½程度に施されている。

坏蓋Ⅱ c 類 (80016、80012) 80016は、天坦に近い天井部をもち、口径が小さい。端部は丸く仕上げられている。回転へラ削りは、天井部に施されるのみである。800012も、80016とほぼ同形同大で、ヘラ削りの範囲も全く同じである。また、単純ではあるが同一のヘラ記号をもつ。ただ、012は016に比べて成形の丁寧さに欠け、歪みや焼けぶくれを生じている。同一工人とまでは断言できないが、極めて近い関係にある人の制作によるものと考えられる。

高坏蓋(80001) 80001は、高坏蓋である。坏縁Ⅱ a 類に擬宝珠形の鈕をつけた形態である。 口縁内は段がめぐる。回転ヘラ削りは天井部から½程度の範囲に施される。

直口壺 (80018) 80018は直口壺である。口縁部は短く直口する。口縁端は丸く仕上げられる。肩部はなで肩であるが、胴部上位¼程で強く屈曲して胴部に至る。底部は回転ヘラ削りを施して、丸底に仕上げている。調整は、外底部のヘラ削り以外は、回転ナデを施している。外面には自然釉がかかっている。

坏身 I b 類 (Fig.30-80011、80005、80014、Fig.31-80003、80006) 大半の坏身が I b 類である。受部径は13cm~16cmの間にある。かえりは、厚く、端部を丸く仕上げるものに005、014、003、006があり、薄く、端部を尖らせるものに011、007がある。回転ヘラ削りは%~½程度の範囲に施される。

坏身 I c 類 (80009) 80009はかえりが短く、受部径が12.2cmと小形で受部が外方へ、水平に近く突出する。ヘラ削りは、底部付近に施される。

器台 (80002) 80002は器台の脚部である。裾部上位に二条の沈線をめぐらせる。長方形の透孔は3ヶ所に配される。内外面とも回転ナデ調整である。

羨道埋土出土の土器(Fig.31) 80035、80036、80040の3点は、羨道清掃中に埋土から出土した完存品である。036は坏身 Ib類、035、040は坏身 Ic類である。

② 鉄器 (Fig.32 PL.32)

鉄器には、馬具、刀装具がある。

刀装具 80101は、鍔金具である。長径5.7cm、短径4.7cmの倒卵形である。刀身を通す中央の孔は長径2.7cm、短径1.9cmである。孔に向かって次第に薄くなる。80003内の破片と埋土中の破片が接合したものである。80102は、鞘金具である。長径2.6cm、短径2.1cm、長1.8cmの筒形である。厚さは2mmである。内面に木質が残る。80014内から出土した。80103、80112は、釘である。用途は不明であるが、80114内から鞘口金具とともに出土した所から見て、刀装に用いられたものではないだろうか。木質が残っている。

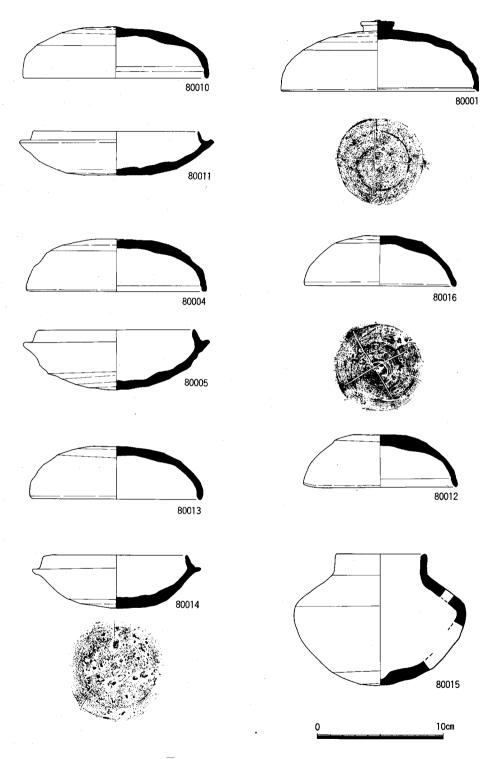


Fig. 30 8 号墳羨道出土遺物実測図(1)(1:3)

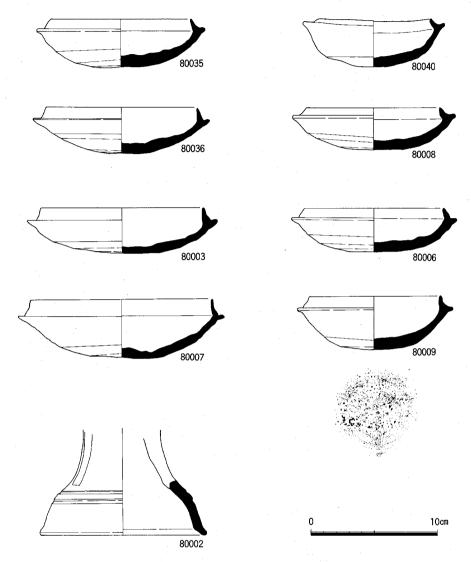


Fig. 31 8 号墳羨道出土遺物実測図(2)(1:3)

馬具 80104~80112は、すべて鐙金具の部品と考えられる。

80104は、木製壺鐙の縁金具である。兵庫鎖がとりつく頂部は、断面円形で、鐙本体にとりつく部分は薄くなり、3ヶ所を鋲留する。縁金具は側面のみで、底面には回らない。端部は鍵形に折れ曲がる。左側の湾曲は本来のものかどうかは不明である。頂部は80004、右側は80003と80007の破片が接続。左側は、80003内の出土である。

80109も、頂部が断面四角形で両側が薄くなり、目釘穴があく。木製壺鐙の縁金具と思われる。

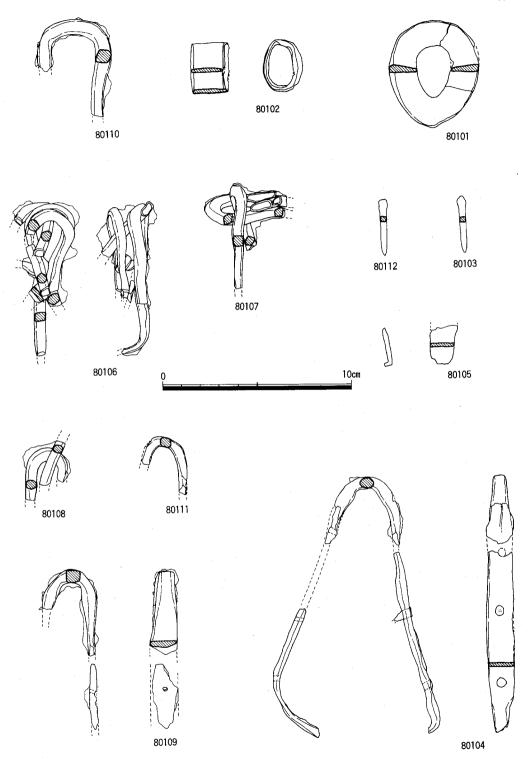


Fig. 32 8 号墳羨道出土遺物実測図(3)(1:2)

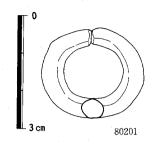


Fig. 33 8 号墳羨道出土遺物実測図 (4)(1:1)

羨道埋土内の出土である。80105は、薄い鉄片で、鍵形に 折れ曲る。木製壺鐙縁金具の端部と思われる。

80106、107、108、111は、兵庫鎖である。106、107が二連つないでいるのはわかるが、全部で、何組、何連分であったかは不明である。106から知られる一連分の長さは、約8 cmである。80110は、兵庫鎖片にしては大形で、鉄質もよい。鉸具の一部と思われる。

羨道部出土の鐙金具は、縁金具が一組あることから、元 来左右一組そろっていたと思われるが、兵庫鎖、鉸具は一

組分しか出土していない。また、出土状況も、同一個体がいくつかに切断され、別個の須恵器 に入れられているという特異な状況である。

③ 装身具類 (Fig.33 PL.33)

閉塞敷石面から耳環が一点出土した。内径1.5cmの銅胎である。金箱の遺存は見られない。 銹化が著しい。

(5) 墓道出土遺物

①出土状況 (Fig.34 PL.19-2)

羨道開口部から若干北へ湾曲し、谷筋に向かう墓道から、多数の土器片が出土した。その多くは須恵器であるが、土師器(擬須恵土師器)も一点出土している。また、耳環、小玉も各一点出土した。

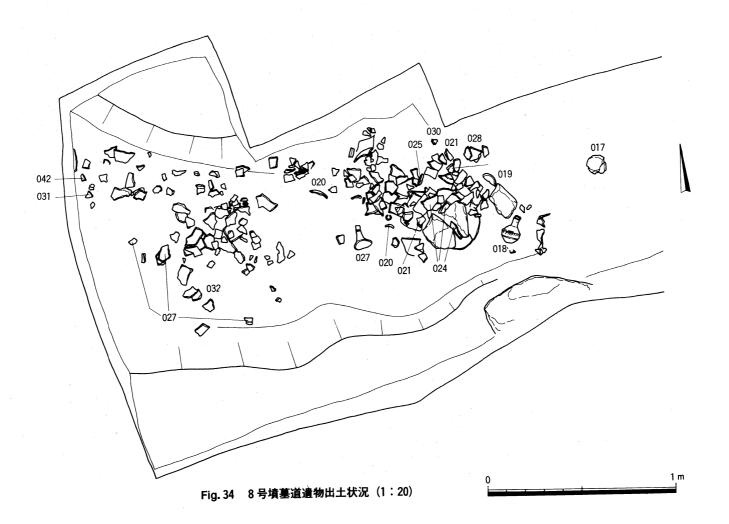
出土状況は、2個の大甕破片を中心に東西二群に分けられる。東群は、80044の大甕を主とし、その周辺に他の器種が散乱している。西群は、80043を主とし、やはりその周辺に他の破片が散乱している。出土した土器は、完形品に復原できるものも含めて、すべて破砕されており、しかも破片の散布状況、接合関係から見て、土圧等の自然要因で、完存品が破砕されたとは考えられない。むしろ、最後に、使用した土器を破砕し、埋納(?)するという儀礼を伴う墓前祭祀が行われた跡と考える方が妥当なのではないだろうか。

土器片の接合関係を少し詳しくみてみよう。接合関係の明らかなる破片はわずかであるがそのうちの大半は、一群内で接合している。しかし、例えば80027などは、脚部が東群に、坏部が西群内にある。そして80044、80043の二つの甕の破片は、それぞれ両群にわたっている。そうしてみると、東西両群は、例えば廃棄の単位など、積極的な意味を付与できるものではないと考えた方がよさそうである。西群は、東群から流れたものかもしれない。

出土した土器の器種には、高坏蓋、坏蓋、坏身、甕、長頸壺、直口壺、高坏、腿がある。

② 土器 (Fig.35、36、37、39 PL.27、28)

器種別に、出土土器について述べていくことにする。



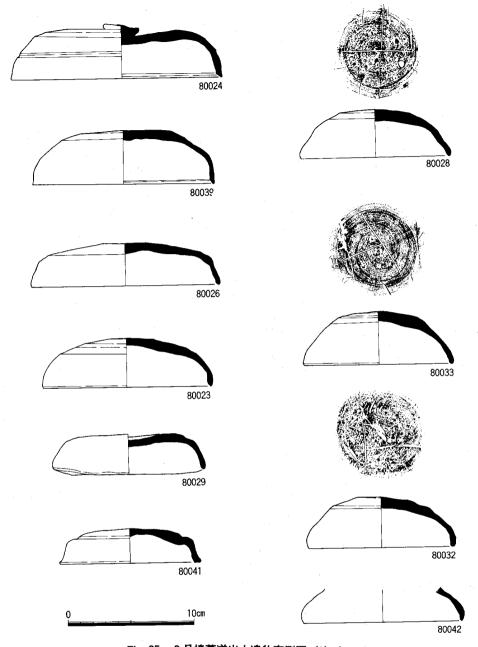


Fig. 35 8号墳墓道出土遺物実測図 (1) (1:3)

高坏蓋(Fig.35-80024) 80024の高坏蓋は、天井部と口縁部の境に凹線状の段がめぐる。 口縁内部にも段がめぐる。回転ヘラ削りは、天井部から½程度に施される。口径は大きく、16.6cm である。

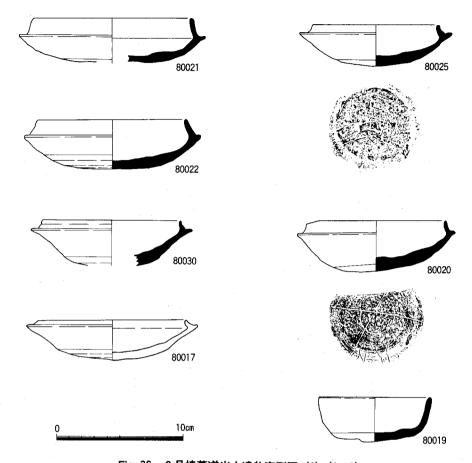


Fig. 36 8号墳墓道出土遺物実測図 (2) (1:3)

坏蓋Ⅱa類(Fig.35-80039) 80039は、径が大きく、口縁内面に段がめぐる。回転へラ削りは天井部から½程度に施される。

坏蓋Ⅱ b 類 (Fig. 35-80026、80023) **Ⅱ** a 類に比べてやや小ぶりになり、口縁端は丸く仕上げられている。ヘラ削りは、026、023とも天井部から½程度に施される。

坏蓋Ⅱ c 類 (Fig. 35-80029、80028、80033、80032、80042) 80028は、平坦でやや凹む天井部をもつ。天井部はヘラ切りのまま未調整である。80028、80033、80032は、ほぼ同形同大である。やや平坦な天井部をもち、口縁端を丸く仕上げる。回転ヘラ削りは、天井部付近のみに施される。また、これらの土器は、羨道出土の80016、012とも、ほぼ同形同大で、調整も共通している。また同一のヘラ記号をもつ。この中で032は、やや口縁部が屈曲し、ヘラ記号の×印も天井周縁部に寄って施されるなど、若干趣きが異なる。しかしいずれにしても、それぞれの製作者の間に、極めて近い親縁性を、推測させる土器である。

80041は異形の坏蓋である。口径は小さく、平坦な天井部をもつ。天井と口縁の境に段がある。

口縁端を面取りし、凹線状に凹ませている。

坏身 I a 類 (Fig. 36-80021) かえりの立上りが直に近く、高い。口縁端部は丸く仕上げられている。かえり部と胴部の内面の境には稜が立つ。ヘラ削りは、稜はナデられて明瞭でないが、受部の直下にまで及んでいる。受部径15cmと、大きめである。

坏身 I b 類 (Fig. 36-80022) かえりは内傾するが、厚手で、端部は丸く仕上げられる。 かえり部と胴部の内面の境は明瞭でない。回転ヘラ削りは、天井から%程度まで施される。

坏身Ⅰ c 類 (Fig.36-80030、80025、80020) 器形はやや小形になり、受部径12~13cmである。かえりの立上がりは低く内傾し、薄手になる。口縁端部は、丸く仕あげるもの (80025、020) と、尖らせるもの (010) がある。ヘラ削りは底部付近のみに施され、底部が平坦になる。 **坏身Ⅱ類** (80019) 平底でかえりをもたない小形の坏身である。口縁は直線にのびながらやや外方へ開く。底部は、ヘラ切りのまま未調整である。

土師器坏身 (80017) 80017は、土師器の坏身である。焼成は良くなく、軟質である。暗赤褐色を呈する。口縁部には、ヨコナデが見られるものの、ロクロを用いたものとは考え難い。 胴部内外面は、回転を用いないナデ調整である。形態は須恵器に似せているが、焼成、手法ともに土師器のものであり、いわゆる「擬須恵土師器」である。

臺 (80038) 80038は、長頸壺の口縁部である。上方に開きながら外反し、端部付近で再び 内湾して直立する。口縁端部はやや尖り気味に仕上げられる。口径10.4cm、残存高6.5cmである。

高坏 (80027) 無蓋の高坏である。口縁部はやや開き気味に直立し、口縁端部は丸く仕上げられる。口縁部と底部の境に沈線がめぐる。底部下半にも一条の沈線がめぐり、そのすぐ上に、板状工具の小口をおしつけたような圧痕がめぐる。坏部の調整は、内面と底部の沈線の上までが回転ナデ、沈線の下は回転ヘラケズリが施されている。脚部は柱状部中位に沈線が二条めぐる。そこから緩やかに開き、裾部で外反気味に大きく開く。脚端部は尖り気味に仕上げられ、凹線状の段がついて下方へわずかに突出する。脚部の調整は、絞りの後回転ナデを施している。

80034は、頸部、口縁部が大きく開く。口縁部と頸部の境には凹線状の段がつく。頸部は柱 状部をつくらず、緩やかにすぼまる。胴部はやや扁平で、最大径は胴部中位にある。底部は平 底気味である。胴部中位以下をヘラ削りする。

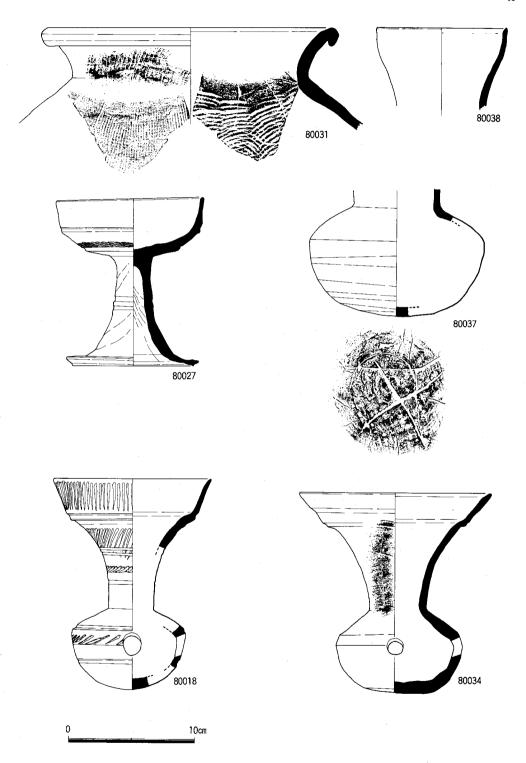


Fig. 37 8号墳墓道出土遺物実測図 (3) (1:3)

直口壺 (80037) 口縁端部を欠く。短く直立する口縁部に、胴の張る胴部がつく。最大径は胴部上位¼程で、それ以下に回転ヘラ削りが施される。胴部最大径で14cmである。

甕 (80031、80044、80043) 80031は、端部が折れ曲がって下垂する口縁部をもつ。肩部以下を欠くが、肩が張る球形胴の甕になると思われる。調整は、頸部から肩部にかけて、平行叩きを施し、上からナデをかける。内面には、同心円文の当て具痕が残る。

80044は、口縁端が面取りされ、その直下に、凹線状の段がつく。頸部は緩やかに外反し、 大きく外方へ開く。胴部は球形に近い。胴部外面は平行叩きで、その上から上半部にカキ目を 施す。内面には同心円文の当て具痕が残っている。

80043は、口縁部を欠く。やや肩の張る胴部になる。底部は丸底である。胴部外面は、平行叩きで、内面には、同心円文の当て具痕が残る。

② 装身具類

墓道から、耳環1個と、小玉1個が出土している。耳環は、内径1.5cmの胴胎のみの遺存であるが、金箔がおかれていたものであろう。銹化が著しい。断面径は短径0.5cm、長径0.8cmである。小玉はガラス製で径0.7cmである。コバルトブルーを呈する。

8号墳からは、他の古墳には見られないほど多量の土器が出土した。ここで、羨道出土土器と、墓道出土土器を比較してみよう。羨道出土土器群と、墓道出土土器群で、共通して多く出土しているのは蓋坏である。坏蓋は、羨道では II b 3 点、 II c 2 点で、墓道では II a 1 点、 II b 2 点、 II c 4 点と、より後出的に特徴をもつ II c 類の割合は、墓道の方が高い。つぎに坏身を見る。羨道では II b が 4 点、 I b が 4 点、 I c が 1 点で、墓道で I a が 1 点、 I b が 1 点、 I c が 3 点と、これも、墓道の方が、より後出的な I c 類の割合が高い。また坏身 II 類を含むことも、新しい様相の特徴であるといえそうである。

しかしその一方では、次のようなことも考えられる。坏身 I a 類~ I c 類、坏蓋 II a 類~ II c 類は、他の古墳の例を見ても、共存幅は長いと考えられる。また、親縁関係にある製作者によって作られたと思われる須恵器が、羨道、墓道の双方から出土している。この坏蓋に記されたへう記号は、8 号墳出土の他の器種の須恵器にも見られるが、8 号墳以外には見られない。このことから、羨道供献土器と、墓道供献土器は、同時に入手されたとも考えられる。以上二つの

墓道出土土器は、羨道出土土器と同時期かやや後出する可能性がつよく、少なくとも溯るものではない。これが、供献の時期を示しているとすると、墓道供献土器は、埋葬に際して行われたか、ある一定の期間をおいて行われた墓前祭祀の後、使用した土器を破砕したものと考えることができよう。

推論から少なくとも言えることは、次のようなことである。

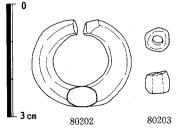


Fig. 38 8 号墳墓道出土遺物実測図 (4)(1:1)

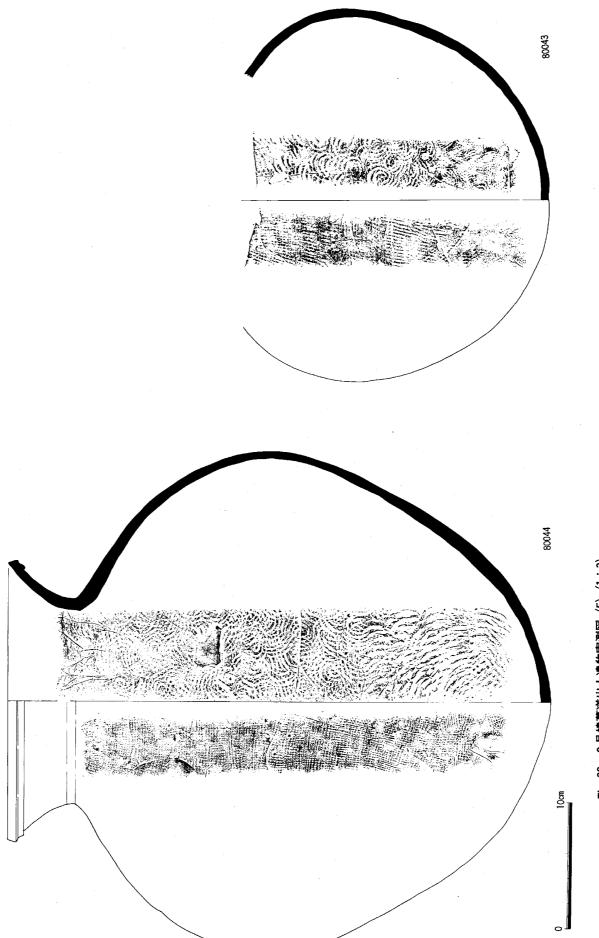


Fig. 39 8 号墳墓道出土遺物実測図 (5) (1:3)

Ⅳ. 小 結

今回の調査は、現況調査を主としたものであったが、数々の興味深い事実が見出され多くの 問題を提供した。ここでは、そのいくつかの問題についてまとめ、今後の検討課題として提出 することで、まとめにかえたいと思う。

以下の項では、次のような問題について、まとめてみたい。

- 1. 出土須恵器の分類と年代
- 2. 石室形態の変遷と、古墳群の形成過程
- 3. 8号墳の供献行為について

1. 出土須恵器の分類と年代

羽根戸古墳群E群から出土した土器は、そのほとんどが須恵器で、わずかに土師器も出土している。この項では、各古墳から共通して多く出土している蓋坏(坏身、坏蓋)を中心に考察を加える。

前章の遺物の項で、坏蓋、坏身をそれぞれ類別した。今一度、簡単にまとめておこう。

坏身は、かえりの有無により $I \cdot II$ 類に大別され、I 類をかえりの高さと形を主として $a \sim c$ に細分する。 $I a \rightarrow I c$ の順でかえりが小さくなる。

坏蓋は、鈕、かえりの有無により、I~Ⅲ類に大別され、I類を外面・口縁部の形状、口径によりI1 a~I1 cに細分する。

細分諸類型間の形態変化の方向は坏身 I a ≠ I c であり、古式須恵器とされるものとの形態的親縁性から坏身 I a → I c となる。坏蓋も同様に II a → II c と想定される。坏身と坏蓋の確実なセット関係は 8 号墳羨道部でみられ、II b 類と I b 類がセットになる。また、8 号墳で、親縁関係の高い製作者を想定した坏蓋 II c 類のヘラ記号×を、坏身の中で捜すと80009、025、020が該当し、いずれも I c 類である。このことから、ほぼ坏蓋 II b 類と坏身 I b 類、坏蓋 II c 類と坏身 I c 類の併行が考えられ、溯って、坏蓋 I、II a 類と、坏身 I a 類の併行関係が推定できる。

これらのことを、小田富士雄氏によって先鞭をつけられ、近年更に充実してきている北部九州の須恵器編年に照らすと、坏身 I a、I b 類、坏蓋 I、I a、I b 類は、I B 期に、坏身 I c 類、坏蓋 I c 類は I 別期にあたる。ただ、各類型の存続幅は重複期間が長いと思われ、時間的な概念のより強い「期」を使うのはためらわれる。しかし、「様式」と呼びかえる程、方法論的手続を踏んでいないので、「I B 期」「I 別期」をそのまま用いることにする。そして、坏身 I a、蓋 I 、I a 類を主体とする時期を「I B 期古段階」とし、6 世紀第 3 四半世紀頃をあて、

坏身 I b 、蓋 II b 類を主体とする時期を「III B 期新段階」とし、6世紀第4四半世紀頃に考えておく。そしてⅣ期を7世紀前半代とする。年代観は、大まかなもので、重複期間が長いと考えられることは、先述したとおりである。また、坏身 II 類、坏蓋 III 類は V 期、 坏身 II 類、坏蓋 II 類は V 期、 坏身 II 類、 坏蓋 II 類は V 期、 坏身 II 類、 坏蓋 II 類は V 期、 坏身 II 類、 坏蓋 II 類は V 期であろう。

2. 石室の変遷と、古墳群の形成過程

Fig. 40は、石室の平面図を、集成したものである。 9 号墳については、福岡県教育委員会の報告書を一部加筆修正して転載した。平面形からは、次の 3 種に種別が可能である。

I類(4号墳)狭長な長方形プランで、羨道は短いものと思われる。

■類(6、7、9号墳) やや縦長の長方形プランで「ハ」の字形の羨道がつく。

■類(8、3、5、2、1号墳) 方形プランに、長く狭長な羨道がとりつく。

これらの石室の変化の方向は、4 号墳が最も堅穴系横口石室との形態的類似を示していることから $I \to II \to III$ 類の順が考えられる。これを、前項の須恵器の年代から検証してみよう。

Ⅰ類の4号墳は、出土遺物がないが、同類か、やや古手の羽根戸古墳群B-4号墳、羽根戸南古墳群E-4号墳は、Ⅱ期~ⅢA期の須恵器が出土している。

Ⅱ類の6号墳では、坏蓋Ⅰ、Ⅱb、Ⅱc類、坏身Ⅰb、Ⅰc類が出土している。古い要素を抽出すれば坏身Ⅰb類と、蓋Ⅰ類で、ⅢB期の中に上限が求められ、ⅢB期古段階までは溯りうる。7号墳は坏身Ⅰa、Ⅰb、Ⅰc類、蓋Ⅱa、Ⅱc類が出土している。ⅢB期のうちに上限が求められ、古階段までは溯りうる。9号墳は、県報告によれば、坏身Ⅰb、Ⅰc、Ⅲ類、蓋Ⅱa、Ⅱb、Ⅲ類があり、上限はⅢB期にある。新段階を大きくは溯らない。

■類の8号墳は、先に述べたように、羨道では I b、 I c 類が主体で、墓道では、坏身 I 類も含まれる。一括性を評価し、最も新しいもので判断すれば、羨道がIV期、墓道が、V 期に比定できる。3号墳は坏身 I a、 I b、 I c 類、坏身が II a、 II c 類が出土している。 II B 期古段階に溯る可能性もあるが、新段階におさまりそうである。5号墳は、坏身 I a、 I b 類、蓋II b、 II c 類がある。 II b 期新段階に上限がおさまろう。2号墳は、羨道第一面に伴う VI 期の土器を除くと、坏身 I b 類、坏蓋 II a、 II b 類が出土しており、 III B 期新段階であろう。1号墳も、坏身 I b、 I c 類坏蓋 I b、 I c 類が主体で、 III B 期新段階~ IV 期に比定できる。

以上のことから、Ⅰ類石室はⅡ期~ⅢA期、Ⅱ類石室はⅢB期古段階~新段階、Ⅲ類石室はⅢB期新段階~Ⅳ期に比定され、須恵器から見た古墳の年代観と、石室の変遷が、よく対応しているといえそうである。

次に古墳の廃絶の時期について考えてみたい。

最終追葬面の明らかな古墳は2号墳と8号墳である。2号墳では羨道床面から ▼期の遺物が 出土している。8号墳では、墓道の遺物が ▼ 期と考えられる。1号墳でも ▼ 期の遺物が見られ

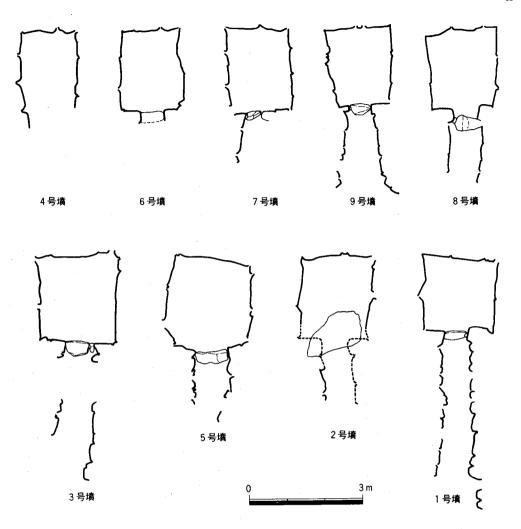


Fig. 40 羽根戸古墳群 E 群平面図集成(1:100)

る。これらは古墳群全体を通じて、最も新しい遺物である。Ⅲ類石室の廃絶時期がV~VI期(7 世紀中葉~後半)であり、古墳群自体もこの時期には廃絶されるものと思われる。

次に古墳群の形式過程について考えてみたい。

羽根戸古墳群 E 群は、大きく 5 群に分けられると考えられる。第 1 群は、谷奥の一群で、 1、2、3、4 号墳からなる。第 2 群は 5、6 号墳からなる。第 3 群は、7、8、9 号墳である。第 4 群は10、11、12号墳で、第 5 群は、13、14号墳であるが、第 4、5 群については、ここでは触れない。まず、6世紀中頃(Ⅲ A 期)に、第 1 群に 4 号墳がつくられる。6世紀後半(Ⅲ B 期古段階)には、第 2 群、第 3 群にそれぞれ 6 号墳、7 号墳が作られ、やや遅れて 9 号墳が

つくられる。 6世紀末(\coprod B期新段階)に古墳は急増する。第1群では3、2、1号墳と相次いで築造される。立地から見て、 $3 \to 2 \to 1$ の順で築造されたと思われる。1号墳のみが開口方向を違えるのは、最終段階の築造であることが関係しているのではないだろうか。第2群では5号墳、第3群では8号墳が築造される。この時期に、墳丘規模が最大になるようである。7世紀前半(\coprod 期)では、大半の古墳が廃絶され、残った1、2、8号墳も、 \coprod ~ \coprod 期には廃絶される。各群内の古墳の立地の変遷は、おおむね、谷口側→谷奥側という方向である。

3. 8号墳の供献行為について

8号墳では、興味深い事実が知られた。それは、羨道内出土須恵器の坏の中に、魚骨と鉄器が入れられていたことである。

無骨は、付論で、木村幾多郎氏が述べておられるように、淡水産の硬骨魚である。頭骨が見られないものの、腹椎、尾椎があるとのことである。元来一匹であったか、あるいは切身であったものと考えられる。食物供献については、小林行雄氏の論考以来注目されているところであるが、今回集成して検討を加える余裕がなかった。今後の課題としたい。関連資料を御存じの方は、御教示頂ければ幸いである。

また須恵器内から出土した鐙金具は、10数点に切断され、別々の蓋坏の中に入れられている という特異な出土状況である。また、やはり須恵器坏内から出土した刀装具類も異様である。 刀装具だけ取りはずし、目釘まで抜いて、収納したのは、どういうわけであろうか。刀身はど うしたのであろうか。

一つの解釈としては、墓道出土の土器と同様、破砕すること自体に意味があるという考え方がある。破砕した上、収納するのは、何か封じ込めたかのような印象も与える。

これについても、類例を調べて検討する余裕がなかった。関係資料を御存じの方は、是非御 教示願いたい。

- 註(1) 浜田信也編「羽根戸古墳群」福岡県文化財報告書第57集 1980
- 註(2) 山崎純男 柳沢一男 浜石哲也編「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財報告書第41集 1977
- 註(3) 大沢正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」日本製鉄史論集 1983
- 註(4) 本課加藤良彦氏の御教示による。
- 註(5) 本課山崎龍男氏の御教示による。
- 註(6)・(7) 橋口達也編「野間窯跡群」(福岡県教育委員会 1982) における分類による。
- 註(8) 年代観については、吉留秀敏編「堤ヶ浦古墳群」(福岡市教育委員会 1987) を参考 にした。

付編 8号墳羨道内出土土器内より検出された魚骨について

佐賀大学非常勤講師 木 村 幾多郎

古墳石室内より、食物が残存して検出される例は珍らしい事ではないにしても、そう類例の 多いものではない。本報告例は、蓋付の杯の内部に魚骨が残存していたもので、後世の持込み による残存とは考えられないものとして好事例に属する。

骨の検出された杯は、羨道部閉塞石と玄門の間に置かれた須恵器群の中の1つで、蓋が被った状態で出土している。他の杯には一個の鉄鐙が割られ、、その破片を分けて入れられており、これら一群の須恵器には、埋葬儀礼に伴う行為の一端が残されているものと考えられる。検出された骨もその文脈のなかで考える必要があるといえる。

骨の検出状況

杯に蓋が被っていたといっても、内部には毛根のようなものがひろがっており、しかも骨と 区別できないような状況であった。明らかに毛根と思われる物を除去し骨だけをそのまま残した。 骨の配列状況は原位置とは思われず、杯の底にかたまった様子を示している。

残存していた骨

骨は脆く取り上げて観察することは不可能で、出土状況のまま観察せざるを得なく詳細は不明である。残存していた骨は魚骨で、他の動物の骨は含まれていない。骨種は脊椎骨及びそれに付随する棘であり、他の部位は確認できない。脊椎骨の保存状況をみると頭部骨格のみ消失したとは考えにくいことから、少くとも頭部は切り離なされて、本来杯中には納められなかったものと思われる。脊椎骨に腹椎・尾椎が含まれているが、同一個体のものとしてつながるのかは確認できない。椎体の形態からすれば、同一種のもと思われる。現在確認できる脊椎骨の数は10個であるが、骨の下にさらに存在する可能性はある。椎体を計測できた個体が2個あり、いずれも腹椎で、(a)椎体長(CL) 6mm、椎体高(CD) 5.5mm、(b)CL =4.5mm、CD =4.0mmである。魚種は脊椎骨の保存状況が悪く確定しがたいが、その特徴はコイあるいはフナに類似している。

以上の魚骨の他に、杯の付近より貝殻の小破片が検出されている。真珠光沢を持ち薄層が剝離しやすい。種名は明らかにしがたいが、残されたカーブからすれば、マガキに近いといえる。 剝離がすすんでおり、カワシンジュガイなどの淡水産貝類の可能性ものこる。検出状況からして、供献されたものであるかは不明である。

おわりに

さて本例のような事例は、少いながらも知られており表の通りで、韓国南部 (新羅・伽耶) の事例も合せて表とした。これに関する詳細は別に述べるとして、読みとれる事項を列挙して 結びとする。

韓国 手元の資料の関係か慶北地方の事例しか選び出せず、百済地域での存在は確認できな

かった。そのうち新羅地域では、石槨内の埋葬木槨外頭部側遺物群の下位にアワビや卵殻を入れた土器が置かれており、伽耶地域では、古墳の主槨ではなく墳丘上につくられた他の石槨内に納められ、状況の判明している例では、ほぼ東西方向の石槨の東側頭部側に小槨をつくり、その内に入れられた土器の内に魚や貝が入れられている。両地域の石槨の形態は異るもののいずれも頭部側におかれていることがわかる。

日本 東国山古墳は竪穴式石室内木棺外に入れられた多量の須恵器の内より検出されている。 差しちがえにした2体の人骨の両者の頭側に須恵器が納入されているが、動物骨の遺存してい た土器の位置については不明である。石室内の須恵器の状況は、韓国の伽耶(新羅)地域のも のに類似しているといえる。横穴式石室でも古い例(中宮1号、上総金鈴塚例)は、石室内石 棺又は人骨埋葬部と奥壁の間、つまり頭部側の土器群の内より検出されている。斎藤忠氏が"生 活にそなえようとする目的のもの"とする土器群である。横穴式石室・横穴の6世紀以降の例 は、羨道又は墓道部に置かれた土器内に検出されている。この変化は、儀礼の起源は、新羅伽 耶地域からの教示とみられるものの、日本国内での食物供献の儀礼の変化を示してるといえよ う。動物遺存体の在り方からすれば、魚の場合頭部を切り落し切身の状態で供献した例(本例・ 東国山例)、頭部までつけていたらしい例(上総金鈴塚)がある。貝殻のうち巻貝については、 調理してあったか不明であるが、二枚貝の場合は、検出時に一対合さっていた場合(東国山1 号・竹並・上ノ原例など)と、左右バラバラで内面を上にして検出された場合(上ノ原例)が あり、後者の例は、調理後供献した例とすることができる。魚は種名の判明している例からす れば、淡水魚の方に偏りがある。貝は、ハマグリも多いが淡水産のカラス貝も多い。韓国例で は、魚はタラ・スズキなど鹹水産、貝もレイシ・サザエなどこれも鹹水産である。日本例との 一番のちがいといえば、鳥の例が多い事で、特に天馬塚の卵殻(鶏・キジ)は、新羅の起源神 話と関連づけられている。

詳細は別稿で述べるにしても、小林行雄氏の考察されているように"黄泉戸喫"の点から考察する必要があろう。

			进 项	地名衣 (日本	P-)			
番号	遺跡名	出土位置	容 器		検出	遺	物	文
7				魚	- 貝	鳥	その他	献
1	羽根戸E群8号墳	羨道部(玄門前)	蓋 付 杯	コイ(?) 脊椎骨 9 個以上			付近に貝殻小片	1
2	竹並古墳 L -40-3	玄 室	須恵器・壺				スッポン 腹甲板・背甲板他	2
L.	G -? -?	墓道	蓋 付 杯		ハマグリ(3対)			1 1
3	城ヶ谷 15 号墳	玄 室					イシガメ 腹甲板(自然死)	3
4	本 城 横 穴		土師・高杯		0			4
5	岩木山古墳	横 穴 式 石 室 養 道 左 側	蓋付杯3個		ハ マ グ リ 各 1 個 づ つ			5
6	夜 須 町		高 杯				ウ ニ 殻	6
7	後 井 3 号 横 穴	羨道玄室寄り	蓋付杯2個		カラスガイ			7
8	中宮 1 号墳	玄室奥壁前	蓋付杯(6	○ 体長10cm以下の小魚				8
9	中臣印達神社裏		須 恵・杯		ハマグリ7個			9
10	狐塚古墳		須恵・杯 (数個並列の1個)	○ イワ シのような大きさ				10
11	東国山1号墳	竪 穴 式 石 室 棺外・土器群	須恵・杯身	0				11
			"		ハマグリ (左・右殻合さる)			1
			"				籾	1
12	八坂神社古墳	横穴式石室	有蓋高杯	0				12
13	七ツ塚古墳		蓋 付 杯		ハマグリ サソリガイ (20個)			.13
14	喰 代 古 墳		蓋付杯 4 個	カレイ	ハマグリ・アワビ			14
15	ニッ塚古墳		杯		〇 1個			15
16	渡 古 墳		杯		○ 1個			16

潰跡地名表 (日本)

番号	遺跡名	出土位置	容 器		検 出	遺物		文献
号	退 郷 石	加丁你官	任 60	魚	貝	鳥	その他	献
17	庭場東山古墳	横穴式石室床面	蓋 付 杯	,	カラスガイ6個			17
18	楽 田	横穴式石室	蓋 付 杯		ハマグリ 11個(左右合さる)			18
19	炭烧平古墳		蓋 付 杯				伊勢エビ(甲殻)	19
20	ジゴ塚古墳		蓋 付 杯				ウ ニ 殻 2	20
21	上総金鈴塚	横穴式石室D区	杯	フ ナ				21
1			杯	ウナギ				ļ
			高 杯	ウナギ]
L_			杯		カラスガイ			
22	上ノ原18号横穴	墓道玄門前	蓋付坩(6C後半)		カラスガイ r 3 ℓ 3(1 対合う)			25
1	24 号 横 穴	墓道左側	蓋付杯(6C後半)		ハマグリ r 3 ℓ 3 (3 対)			
L	50 号 横 穴	玄室頭部右上	(5 C後半)		-		ウ リ	<u> </u>
参 1	筑前王塚古墳	羨 道 閉 塞 内	須恵杯3個				底部に「ホホノ キ」の業脈痕	22
2	新田古墳		有蓋高杯				菓子形土製品10個	23
3	高蔵1号墳		大形台付鉢				鉄 製 釣 針	24

遺跡地名表(韓国)

				7 C M 27 (17)				-
番号	ide out of	出土位置	容 器		検 出	遺物		文
	遺跡名	拉工心見	容器	魚		鳥	その他	献
1	慶北高霊郡池山洞34号墳	34SE-3	高 杯 ⑧			3 点		1
Ιİ			高 杯 ⑥	タ ラ 骨45点(脊椎骨6点)				
			高 杯 ⑤	H 10/11 (1) (12 () 0/11/)			カ ニ (2 点)	
2	34号墳	連結石槨		小魚・3個体]
	or 🗆 total	OFNIX O	高杯⑥		レイシ78個サ ザ エ	1		1
3	35号墳 池 山 洞 44 号 墳	35NW-2 1 号 石 槨			7 7 -	ニワトリ Tib.1		(2)
5	(5 世紀)	6 号 石 槨				ニワトリ Fem.2		ا ّ [
6		11 号 石 槨			-	ニワトリC1 T1 Ster3 Hum3、Tib3、Fib2		
7		14 号 石 槨				0]
8		16 号 石 槨				ニワトリ Hum1, Fem3, Tib3		ŀ
9		25 号 石 槨				ニワトリ		
10		32 号 石 槨				ニワトリ	(44号墳 他に) 馬歯10個あり)	
11	池山洞45号墳	2 号 石 槨				ニワトリ		
_			<u><u></u></u>			ニワトリニワトリ		-
12		6 号 石 槨	有蓋高杯② 有蓋高杯②	0		ニワトリ		1
13	慶北星州郡 星山洞38号墳	第 2 槨			レイシ (20 個 以 上)			3
	基川桐38 亏填		有蓋短頸壺(168)		レイシ			1
			有蓋四耳付短頸壺(174)		レイシ]
14	慶北・慶山郡・林堂洞	?	?	0	0	0	カニ・ウマ・ウシ	4
15	慶 北・慶 州皇南洞98号墳	南墳封土内	円底土器壺		0		獣骨・小形工器	5
		-	円底土器壺		0	0	獣骨(含大形獣) 小 形 土 器	.]
			積石内部		0]
16		副解	+	0			len den	-
1.5	磨北・磨州市	=1 who 12 ity 25 And	円 <u>底</u> 壺 鉄釜内横窓形土器		-	卵殻(ニワトリ)	籾 殻	6
17	慶北・慶州市皇南洞155号墳	副葬品収蔵櫃				7個·卵容液 卵殼10個分		- "
	(天馬塚) 6 C 初		短 頚 壺			卵殼10個分		┨
18	慶北・慶州市 皇南洞10号墳	第 2 槨		スズキ(脊椎骨)		〇 (肋 骨)		7
19	慶北・慶州市金鈴塚	-	台付長頸壺		アワビ			8
20	慶北・達西郡達西面古墳		高 杯		(19 個)			9
21	慶北・大邱市			軟 骨 魚脊椎骨 5 個				10
22	慶北·漆谷郡 仁 洞 1 号 墳		有 蓋 壺	0				11
23	慶北・高鑑郡 古衙二洞古墳				カキ			12
24	慶北・慶州市路西里 138 号墳		長 頸 坩			ニワトリ		13
ı		111 /1 (201 103)	高 坏		-		殺 類	i

文献 所在地(日本)

- 1. 本報告例
- 2. 福岡県行橋市
- 3. 福岡県宗像市
- 福岡県北九州市八幡西区本城鵜巣 島田寅次郎、1934「福岡県の横穴」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書9、福岡。
- 5. 福岡県築上郡新吉富村宇野岩木 岡為蔵、1906「珍らしき古墳遺物」考古界 6 3 、東京。
- 6. 福岡県朝倉郡夜須町 島田寅次郎、1934「福岡県の横穴」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 9 、福岡。
- 8. 岡山県津山市剣戸 近藤義郎、1962「中宮第1号墳発掘調査報告」佐良山古墳群の研究1。
- 9. 兵庫県竜野市揖保町中臣 小林行雄、1959「黄泉戸喫」『古墳文代論考』に(武藤誠教示)とあるもの。
- 10. 京都府長岡京市 文献 9 (小林聞書)。
- 11. 和歌山県和歌山市東中田 金谷克己、1960「紀伊の古墳3 東国山古墳群」。
- 12. 滋賀県愛知郡湖東町祇園 文献 9 (及川幸夫談)。
- 13. 三重県名張市長尾七ツ塚 三重県教育委員会、1954「三重考古図録」(図版78)。
- 14. 三重県上野市喰代高猿 文献13、大西源一、1912「伊賀の遺跡遺物(6)」考古学雑誌 2 9 、東京。
- 15. 岐阜県美濃市加茂市古井町二ツ塚 林魁一、1933「蘇陽雑話1」ドルメン2-6、東京。
- 16. 岐阜県可児郡可児町渡 文献15に同じ。林魁一、1933「蘇陽雑話 3」ドルメン 2-12、東京。
- 17. 岐阜県海津郡城山村字庭田 円満寺 林魁一、1933「蘇陽雑話 2」ドルメン 2 9、東京。
- 18. 愛知県大山市 文献15に同じ。
- 19. 愛知県 斎藤忠、1961「埋葬の儀礼」日本古墳の研究。
- 20. 石川県加賀市作見町富塚 上田沖、1922「加賀能登の古代遺跡」石川県史蹟名勝調査報告1。
- 21. 千葉県木更津市長須賀 直良信夫、1951「自然遺物 金鈴塚古墳出土生物遺存体の古生物学的調査」上総金 鈴塚古墳(千葉県教育委員会)。
- 22. 福岡県嘉穂郡桂川町 川上市太郎、1935「筑前王塚古墳」福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書11。梅原末治・小林行雄、1940「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」京都帝国大学文学部考古学研究報告15。
- 23. 愛知県渥美郡小鷹野新田 清野謙次、1949「古墳から発掘せらた土製素餅類似品 (模造と餅と菓子)」人類 学雑誌60-3、東京。若林勝邦、1986「斎甕に入りしまま発見されし品」考古学会雑誌1-1、東京。
- 24. 愛知県名古屋市熱田区 斎藤忠、1961「埋葬の儀礼」『日本古墳の研究』、東京。
- 25. 大分県中津市上ノ原 未報告 (村上久和氏の教示による)

文 献(韓国)

- 1. 金鍾徽、1981「高霊池山洞古墳群 32~35号墳・周辺石榔墓」啓明大学校博物館遺跡調査報告 1 、大邱。 楊洪準、1981「高霊池山洞古墳에서出土된動物遺骸에관한考察 — 大伽耶古墳에서発掘된動物遺骸에関하여」 高霊池山洞古墳群。
- 2. 尹容鎮、金鍾徹、1979「大伽耶古墳発掘調査報告書(44、45号古墳)」高霊郡。 楊洪準、1979「池山洞44号古墳出土動物遺骸에対む考察」大伽耶古墳発掘調査報告書。
- 3. 啓明大学校博物館、1988「開館10周年記念 星州星山洞古墳特別展図録」。
- 4. 鄭永和、1988「慶山林堂宅地開発地区内廃古墳発掘調査経過」嶺南考古学5、釜山。
- 5. 文化公報部文化財管理局、1976「慶州皇南洞第98号古墳(南墳)発掘略報告」 서울。
- 6. 文化公報部文化財管理局、1975「天馬塚 慶州市皇南洞第155号古墳発掘調査報告書」서울。
- 7. 斎藤忠、1937「慶州皇南里第109号墳皇吾里14号墳調査報告」昭和9年度古墳調査報告書第1冊。
- 8. 梅原末治、1932「慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告」大正13年度古蹟調査報告第1冊。
- 9. 文献7中の記述。
- 10. 尹容鎭・金英夏、1966「仁洞・不老洞・高霊古衙古墳発掘調査報告」慶北大学校博物館叢刊 2 。 白甲鏞、1966「古墳出土 의動物遺骸 에関 む報告」仁洞・不老洞・高霊古衙古墳発掘調査報告。
- 11. 文献10に同じ
- 12. 文献10に同じ
- 13. 金載元・金元龍、1955「慶州路西里 4286年発掘調査報告雙床塚・馬塚・138号墳」 (国立博物館古墳調査報告 2)



Fig. 41 8 号墳出土魚骨

土 器 観 察 表

須恵器杯身

貝思石	科学									
Fig.	No.	類	口径	器高	胎土	焼成	色調 (内、外)	ヘラ 記号	ロ ク ロ 回転方向	出土地点
6	10024	Ia	12.0	4.0	砂粒多	良	灰色		右	玄室内~羨道埋土
	10010	Ιb	10.4	4.5	,	"	暗灰色		左?	*
	10013	,	12.2	4.8	"	"	外よりやや暗い灰色、灰色		右?	,
	10022	,	11.6		,	"	やや暗い灰色			"
	10001	Ιc	10.0	3.4	*	やや軟	明赤褐色、明灰色	0	右	玄室内
	10002	,	11.0	4.0	"	軟	淡黄灰色、淡褐灰色		"	羨道
	10003	".	10.1	3.1	"	やや軟	明赤褐色、灰色	0		玄壁室内~羨道埋土
	10020		11.6	2.9	,	良	暗青灰色			"
	10021		12.6	2.2	微砂粒多	"	暗灰色	İ		*
10	20008	Ia-Ib?	口径 14.8 受径 13.2		微砂粒若干	"	淡灰色	1		羨道~玄室内埋土
	20003	П	10.0	3.6	砂粒多	"	灰色			*
15	30006	Ιa	13.0		,	"	灰色、褐灰色			羨道 (閉塞内)
	30002	Ib	11.0	4.0	,,	"	灰色		右	. "
	30003	"	12.4	3.9	,,	,	暗灰色		"	*
	30007	Ιc	7.8		,	,,	 灰紫色	0	ļ	*
19	50003	Ιb	8.2		,	,	灰色		右	羨道~玄室内埋土
	50002	II a	11,3		,,	"	灰色、淡灰色		左	*
24	60007	Ιb	口径 15.6 受径 13.1	2.8	"	,	灰色、暗灰色	1.		墳丘表採
	60008	Ιc	口径 13.6 受径 11.2	3.5	,	,	灰色、淡灰褐色	0?		"
26	70008	Ιa	13.8	5cm弱	砂粒若干	,,	灰色、暗灰色		右	玄室内埋土
	70007	Ιb	15.6	4.9	砂粒多	"	灰色			,
	70006	Ιc	11.8	3.8	,	,	暗灰色			,
30	80005	Ιb	12.4	4.8	,,	"	灰色		右	閉塞内
	80011	"	13.1	3.2	,	"	*	-	"	"
	80014	,	口径 12.4 受径 11.5	4.2	,,	,	暗褐灰色			"
31	80003	,	12.4	3.6	"	,	灰色		. 右	"
	80006	,,	11	3.5	"	,	淡灰色、灰色		,	*
	80007	,	14.4	4.6	,	"	黄灰色、灰色		左	*
	80008	,	10.5	3.4	"	,	淡灰色		右	"
	80036	,	12.0	3.7	,	,	灰色、黄灰色	-	,	羨道 (閉塞外)
	80009	l Ic	10.3	4.2	,	,	灰色	0		閉塞内
	80035	"	11.2	3.9	,	,,	暗灰褐色、黄灰色		右	羨道 (閉塞外)
	80040	,	8.9	3.8	砂粒若干	,	灰色		1	*
35	80041	?	11.0	2.8	,	,	,			
36	80021	Ia	12.4	4	微砂粒多	,	黒灰色、灰色			墓道
- •	80022	Ib	11.8	4	砂粒多	. "	灰色			"
	80020	I c	11	4	,	,	灰色、黒灰色			,
	80025	"	12	3.3	粗砂粒多	,	暗灰褐色、黒灰色	lo	1	羨道部(閉塞内右壁際)
	80030	,	11.0	3.7	砂粒多	やや軟	赤灰褐色、暗灰褐色			羨道部 (右壁際)
	80019	п	8.8	3.5	,	良	灰色、暗灰色	1		墓道

須恵器、杯蓋

Fig.	No.	類	口径	器高	胎土	焼成	色調(内、外)	へラ 記号	ロクロ 回転方向	出土地点
5	10007 10005 10011	II a II b	15.0 13.4 14.8	2.9 4.3 4.4	砂粒多	良	暗灰色、やや暗い灰色 灰色、暗灰色 灰色		左	玄室内~羨道埋土 〃 〃

Fig.	No.	類	口径	器高	胎土	焼成	色調 (内、外)	へラ 記号	ロ ク ロ 回転方向	出土地点
5	10012	Ць	13.0		砂粒多	良	暗褐灰色		右?	玄室内~羨道埋土
	10023	"	14.0	4.4	*	"	暗灰色		右	,
	10025	"	14.6		"	"	灰色、暗灰色		"	"
	10004	Пс	12.6	3.6	* .	"	やや暗い灰色	0	"	"
	10006	"	11.8	3.7	,	"	暗灰色	0	"	,,
	10009	"	12.0		, .	"	* ,			,
	10014	"	11.4		"	"	やや紫味のつよい灰色			*
	10015	"	12.4	2.75	"	"	淡灰色、灰色			* .
	10019	Ш?	13.4	1.4	"	やや軟	暗灰褐色			"
	10016		12.8	2.7	"	良	淡灰褐色			*
	10017		15.4	2.7	"	"	淡黄灰褐色、淡黄灰褐色~黒褐色			,
	10018		14.2	1.7	"	*	灰色			"
10	20006	I a	13.6		"	"	暗灰色		右:	"
	20005	Пь	13.6	4.5	,	"	紫灰色、暗灰色		右	羨道~玄室内埋土
	20007	H	口径 11.4 受径9.8		微砂粒若干	"	灰色			"
	20010	"	口径 12.8 帰り径10.8	2.2	砂粒多	"	灰味の強い紫灰色、暗灰色		左	羡道付近墳丘表採
	20002	IV	11径 15.2 帰り径 12.8	1.7	,	"	淡灰色、やや暗い灰色			羨道
15	30001	II a	13.4	4.2	"	,	灰色		右	,,
	30004	4	15.4		,,	,	暗灰色		左	羨道 (閉塞内)
	30012	Пь	13.8		微砂粒若干	"	,,			*
	30005	II c	6.6	3.9	砂粒多	"	,,		右	"
	30013	"	12.8	4.0	微砂粒多	"	青灰色、淡黄灰褐色		,	,,
	30014	,	13.6	3.1	砂粒多	"	淡灰色、灰色			羡道埋土
19	50004	Шь	12.4	3.9	,	やや軟	灰色		左	デジョン 美道~玄室内埋土
	50001	Πc	11.6	3.1	,,	良	暗灰紫色	0	右	/
29	60001	I	13.4		"	"	暗灰色	Ŭ.	,	玄室埋土
	60002	Ιb	14.8		"	,	淡褐灰色		,	/
	60004	D	14.7	2.6	微砂粒若干	,,	やや灰色の強い青灰色			羡道埋土
	60005	,	14.8	2.8	砂粒多	,,	灰色			玄室埋土
	60003	Пс	14.2	3.0	,	,,	灰色、黄灰色			閉塞面上
26	70005	Ιb	14.4	5cm 📆	砂粒若干	,	灰色、淡灰色			玄室内羨道埋土
	70002	II a	15.2		,	,	淡灰色、灰色			墳丘表採
	70003	<i>y</i> .	15.8		砂粒多	,,	灰色		右	/
	70009	Пс	12	4.1	"	,	淡褐灰色	l	71	,
	70010	4	11	3.1	微砂粒多	,	暗灰色			羡道埋土
30	80004	Пь	14.2	4.2	砂粒多	,	灰色		左	次 旦 佳 上 閉 塞 内
	80010	, ,,	14.6	4.1	1/2 /	,	,		右	/n/25(1)
	80013	,,,	13.4	4.2	,	,	暗灰色		左	*
	80012	Пс	12	4.2	,	,	灰色、暗灰色	0	ДГ,	,
.	80016	/	12	4.2	,	,	灰色、暗灰色	0	右	,
1	i		12	1	,		内:淡黄灰色		10	
35	80039	II a	14.3	4.3	*	やや軟	外·他一略灰色		*	羨道 (開塞外)
	80023	Пь	13.4	3.9	砂粒多	良	淡黄灰色		右	墓道
	80026	"	14.8	3.4	"	"	暗灰色		左	羨道部(閉塞内右壁際)
	80028	Пc	11.8	2.8	*	やや軟	暗灰褐色	0	右	*
ĺ	80029	"	11.9	3.2	砂粒若干	良	灰色		左	,,
	80032	*	11.5	4.0	砂粒多	"	*	0		羨道部(右壁際)
l	80033	"	11.8	4.2	*	やや軟	黄灰色	0		羨道 (閉塞外)
	80042	"	12.6	2.7	砂粒若干	良	灰色	.	1	慕道
	80024	"	16.6	4.4	砂粒多	,	淡黄灰色		ł	"

須恵器**、甕**

Fig.	No.	口径	器高	胎土	焼成	色調(内、外)	へ 記号	ロ ク ロ 回転方向	出土地点
6	10027		口縁高 5.7	砂粒多	良	灰色	0		玄室内埋土
19	50005	底径 8.1	9.6	"	やや軟	淡黄灰褐色	0	左	羨道埋土
26	70001	口径 15.4 胴部最大径 12.8	20cm強	"	良	黒色			玄室埋土
37	80031	22.6		砂粒若干	"	灰色			羨道部 (右壁際)
39	80043	最大胴径 29.6	24.3	砂粒多	やや軟	暗灰色	0		幕道
	80044	口径 22.0 最大胴径 40.0	43.4	,	良	黑灰色、上半一淡黄灰色下 黑一黑灰色	0		"

須恵器、壺

Fig.	No.	口径	器高	胎土	焼成	色調(内、外)	ヘラ 記号	ロクロ回転方向	
24 30 37	60006 80015 80037 80038	10.0 口径 7 頸径 7.5 最大胴径 14.0 10.4	2.6 器高 10.4 胴部最大径 13.6 10.1 6.5	砂 粒 多 。 。	良りりり	黑褐色 暗灰色 黑灰色 灰色	0	右	玄室埋土 閉塞内 羨道(閉塞外)

須恵器

Fig.	No.	器種	口径	器高	胎土	焼成	色調(内、外)	へラ 記号	ロ ク ロ 回転方向	出土地点
6	10008	高杯蓋	14.4	4.4	砂粒多	良	淡灰色		右	玄室内~羨道埋土
30	80001	,	15.8	5.5	,	"	灰色			閉塞内
6	10026	高杯	13.2		砂粒多	"	灰色、暗灰色			玄室内埋土
37	80027	,	11.6	13.4	,	"	淡灰色~黒灰色	0	1	羨道部(閉塞内右壁祭)
6	10028	堤瓶	3.8		砂粒多	"	灰色、暗灰色	. 0		玄室内~羨道埋土
PL.24	30010	"			,	"	灰色		}	羨道 (閉塞内)
10	20001	高台付杯	口径 12.2 高台径 8.6	3.9	砂粒多	"	灰色、灰色+灰白色			羡道
15	30008	器台	接合部径 8.8		砂粒若干	"	暗灰色			羨道 (閉塞内)
31	80002	"	脚裾部径13	8 cm強	砂粒多	,	淡灰色、黒灰色			閉塞内
15	30009	器台 or 台付坩?	脚端径 12.4		,,	"	暗灰色			羡道 (閉塞内)
37	80018	腿	口径 12.6 頸径 3.7	16.8	砂粒若干	,,	淡灰色		左	墓道
"	80034	"	口縁径 15.8 胴部最大径 10	高さ 15.9 頸径 4.5	砂粒多	"	暗灰色	0	"	羨道 (閉塞外)

土師器

Fig	No.	器種	口径	器高	胎土	焼成	色調 (内、外)	へラ 記号	ロ ク ロ 回転方向	出土地点
36 26	80017 70004	杯身甕	口径 11.6 受径 13.6 12.8	3.1	砂粒若干砂 粒 多砂粒若干	軟良軟	赤褐色 灰褐色、暗灰色 丹塗			墓道 玄室内埋土 羨道
10	20004	盤 把手	21.0 最大厚 4.5	3.0 長さ 約5cm	砂粒石干砂粒多	良良	次白赤褐色 淡白赤褐色			淡 ^但 羨道~玄室内埋土

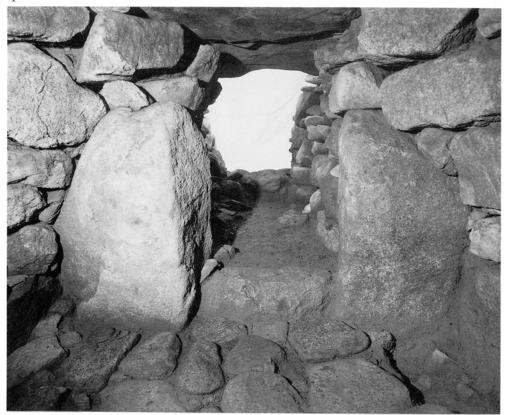
図版

PLATES



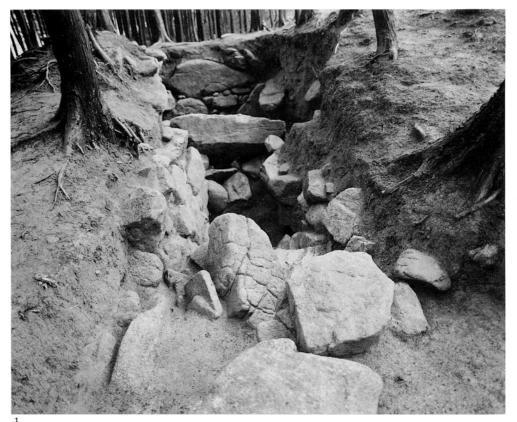










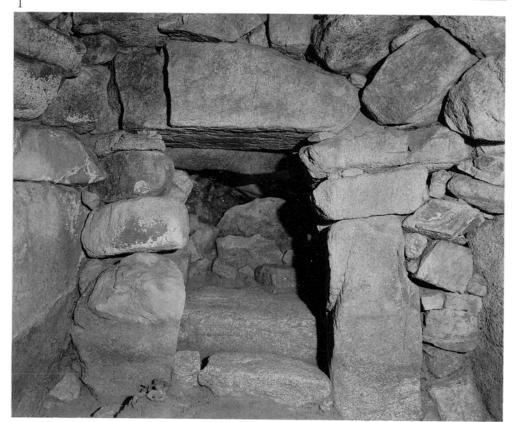


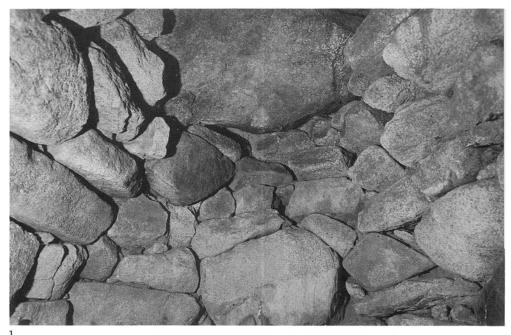


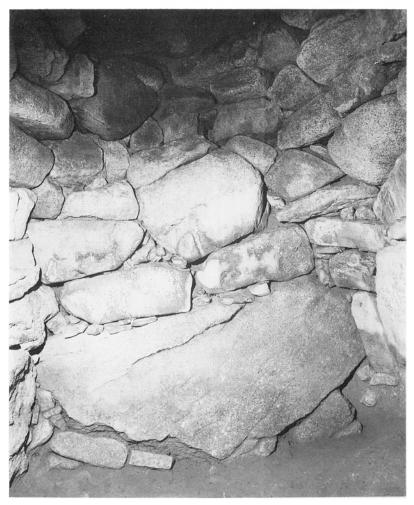


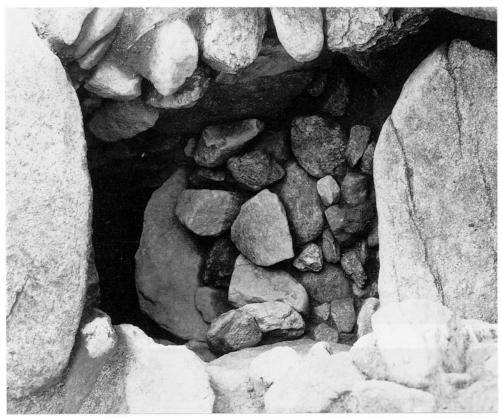




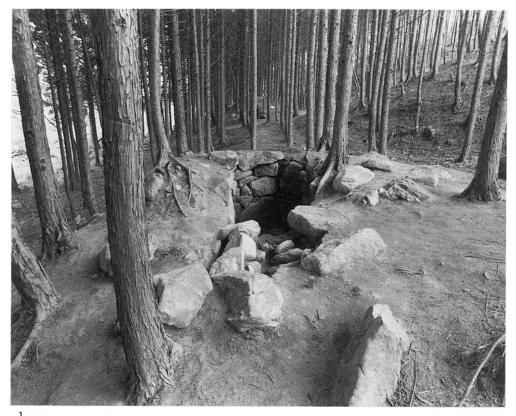














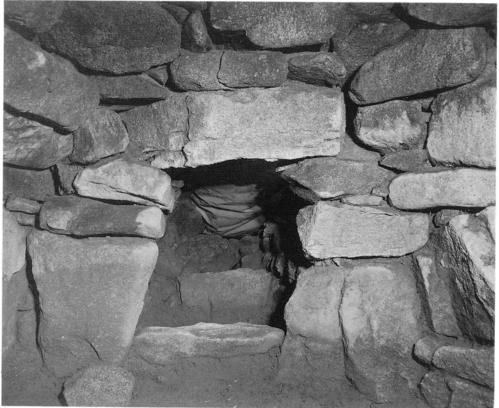








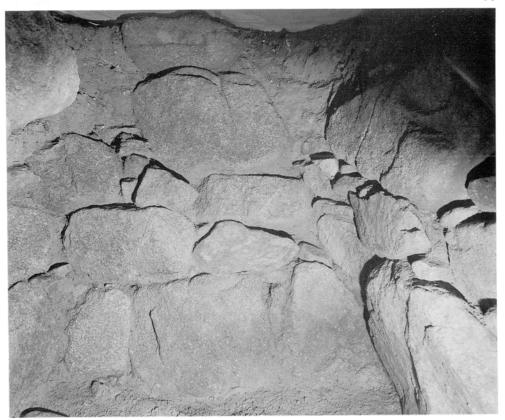


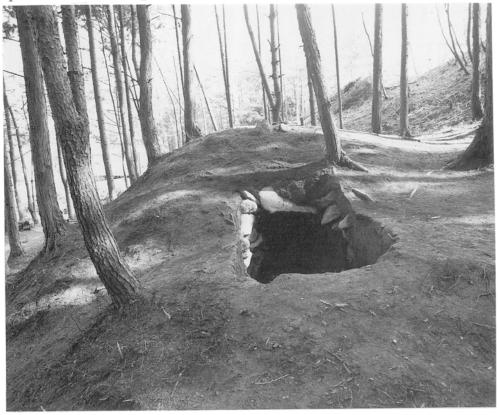


2













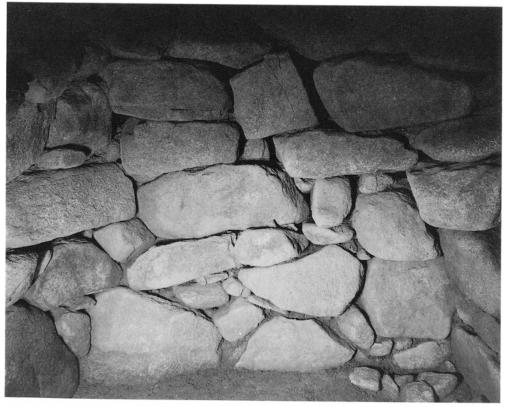


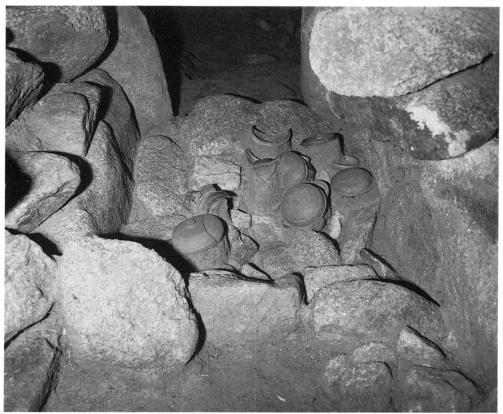




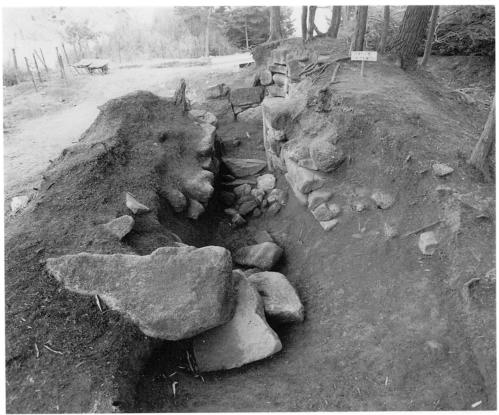


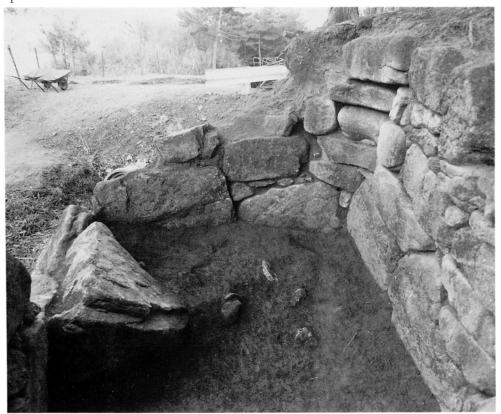








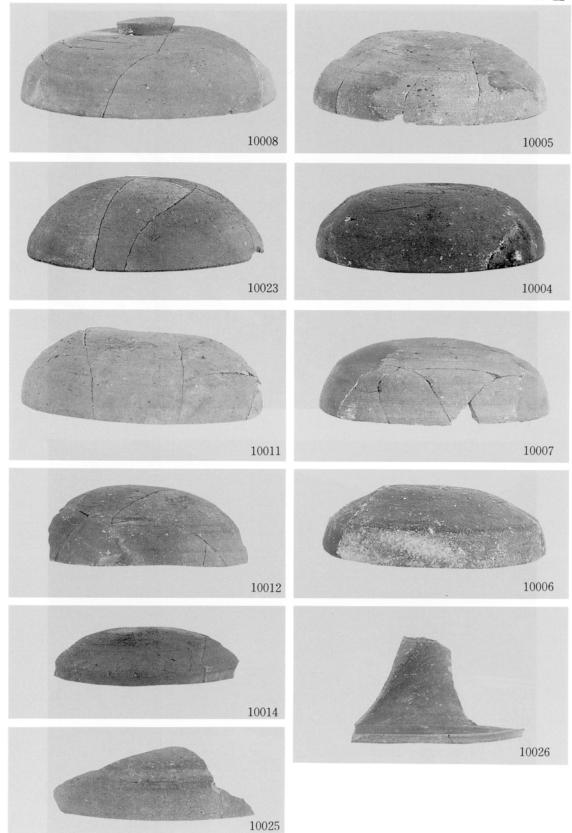


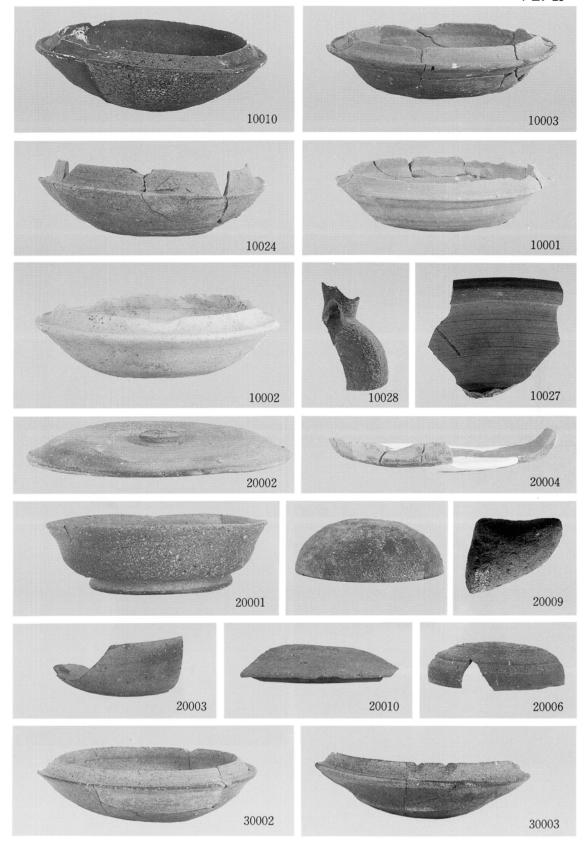


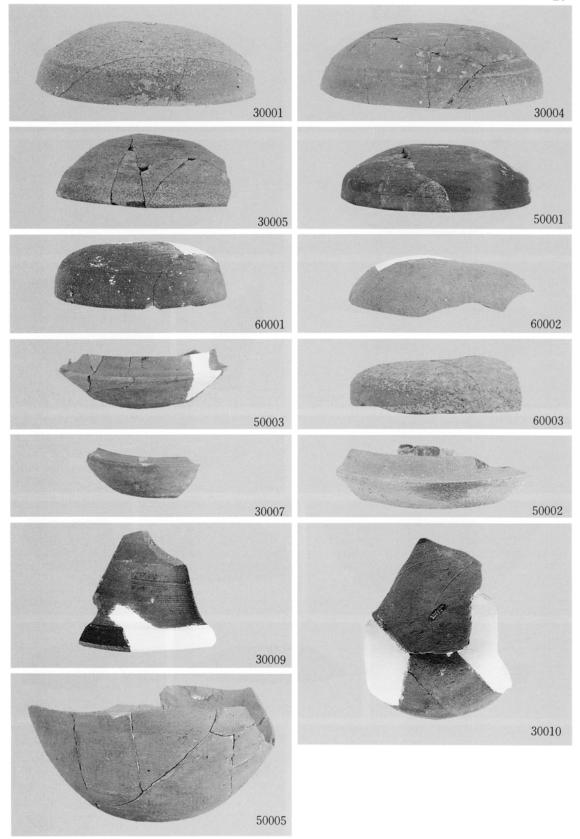


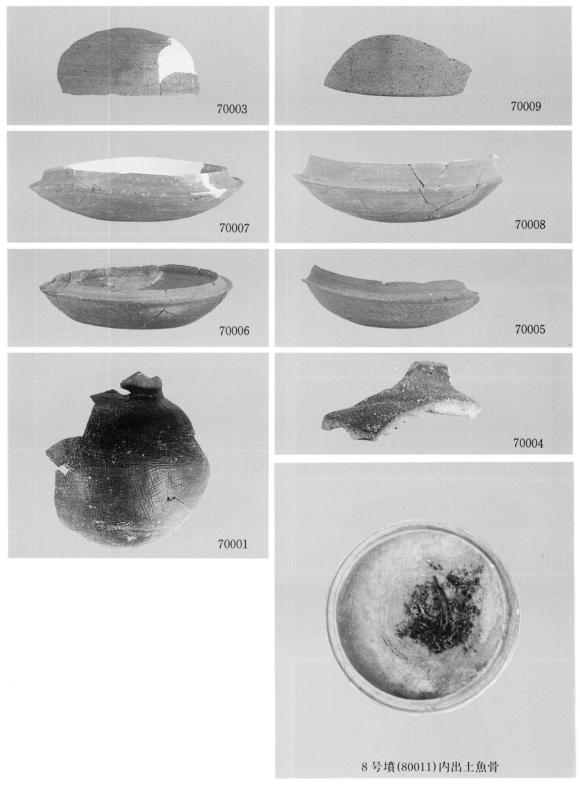


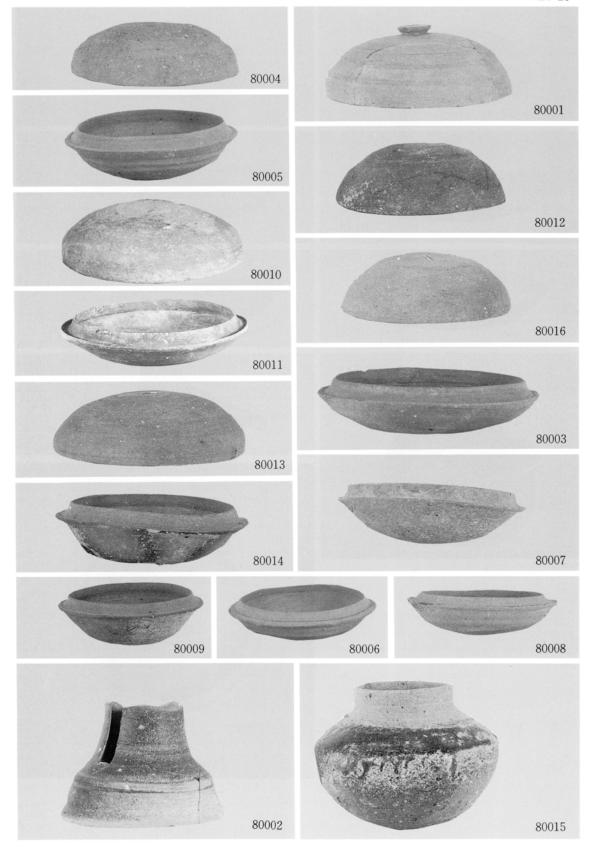
2

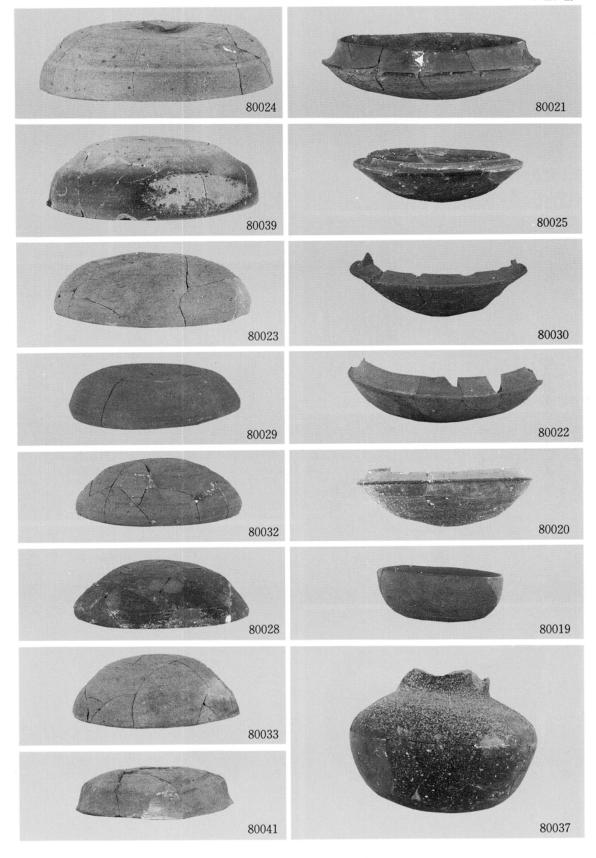




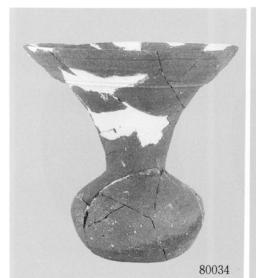






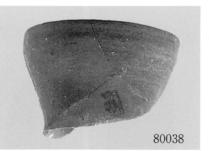


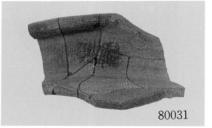
PL. 28

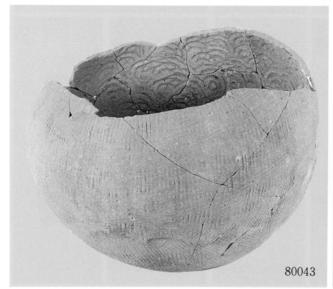




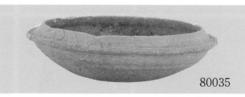


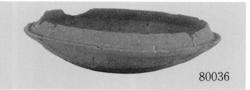




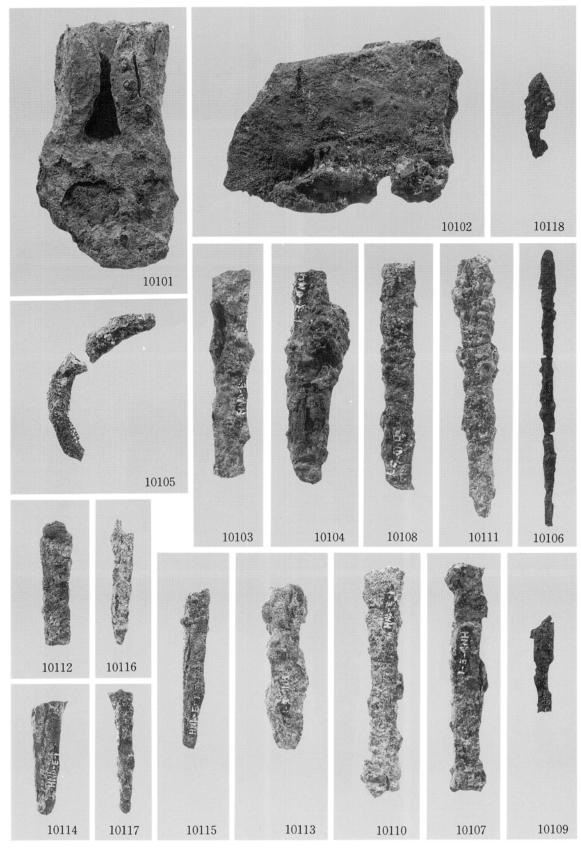


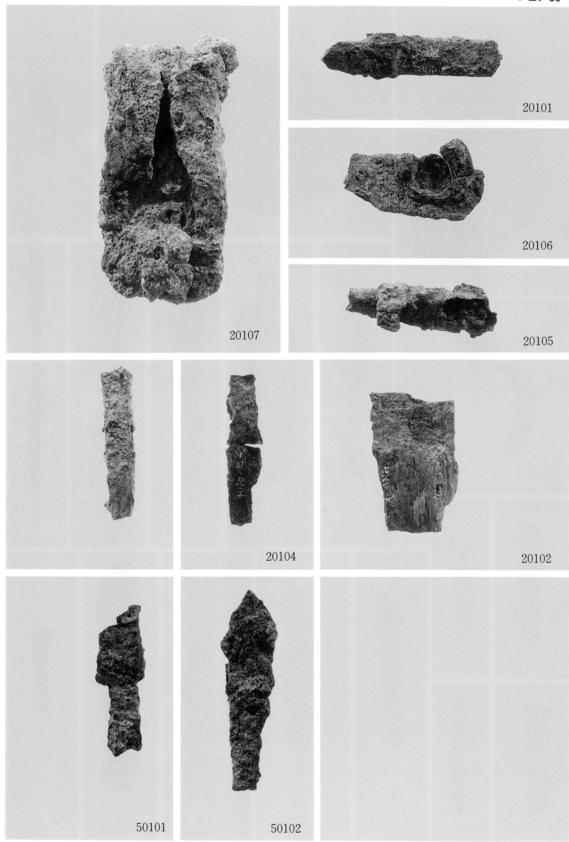




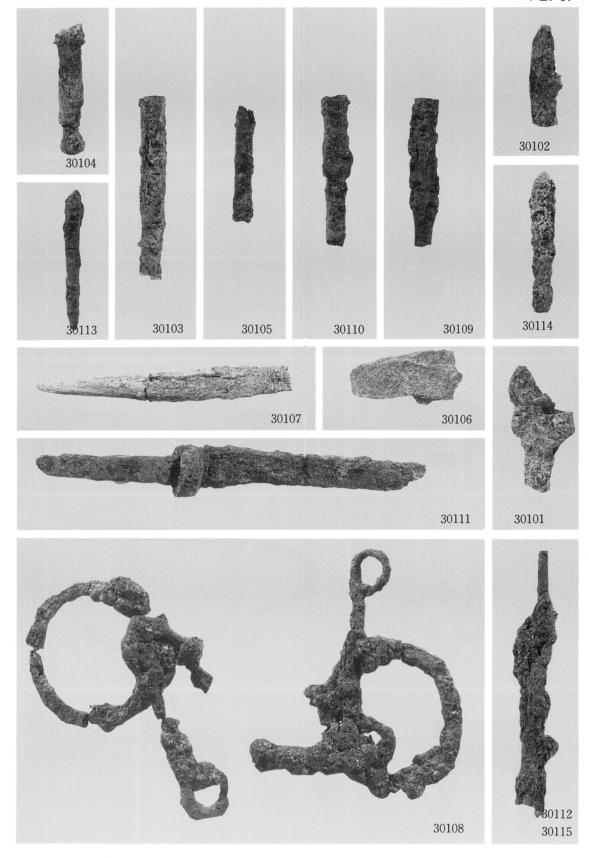




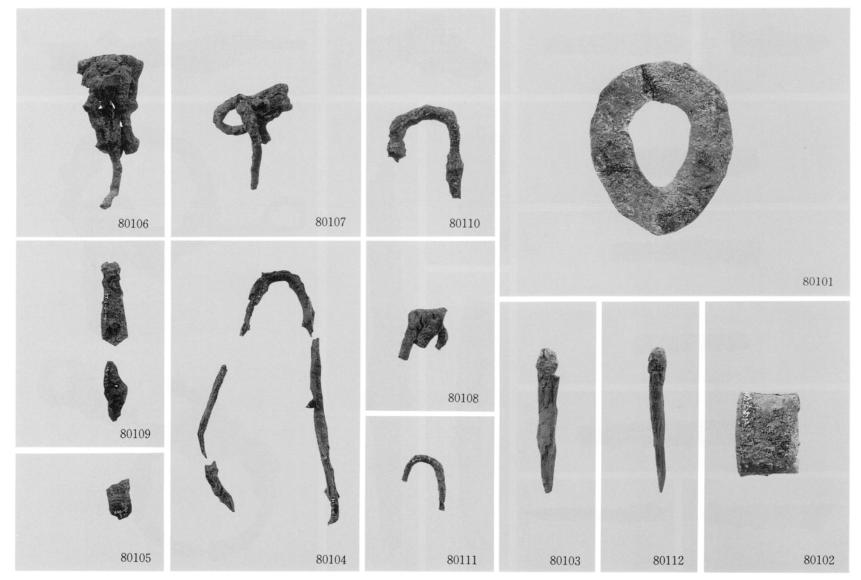


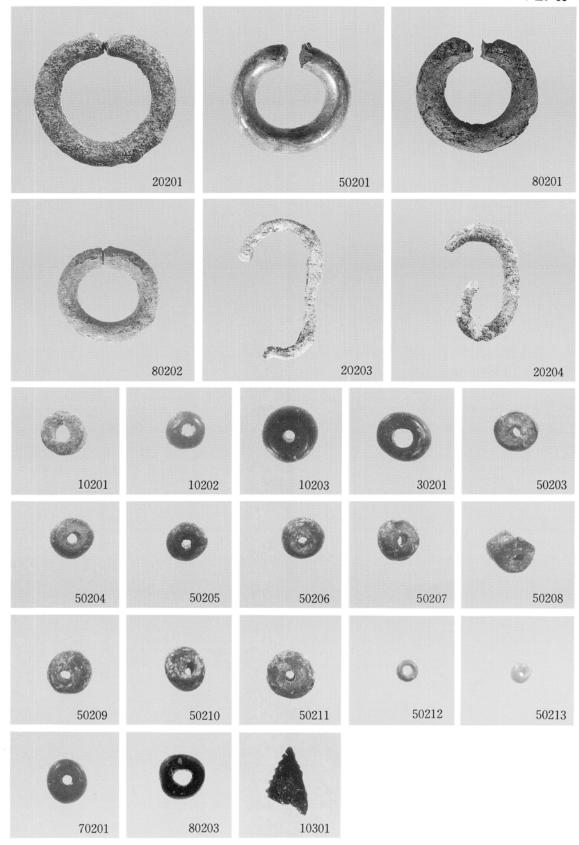


PL. 31



PL. 32





羽根戸古墳群 -西区西部墓園建設にともなう調査(2)-

第198集 福岡市埋蔵文化財調査報告書

1989 (平成元年) 3月31日

発 行

福岡市教育委員会 福岡市中央区天神一丁目8番1号

祥文社印刷株式会社 刷 印